
セプティモゲート―聖者の黙示録―

佐川クロム

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

セプティモゲート―聖者の黙示録―

【Nコード】

N4606V

【作者名】

佐川クロム

【あらすじ】

妖魔と呼ばれる謎の生命体によって引き起こされた虐殺事件、俗に言う《漆黒の氾濫》から3年。

京都に住む高校生、阿倍野晴也は1人の少女と出会う。

少女の名は神村梓。少女は弓と退魔の力を宿した矢を武器に妖魔と戦っていたのだった。

梓との出会いで晴也は妖魔に対抗し得る力《魔能》に覚醒し、否応なしに戦いに巻き込まれる。

妖魔との戦いの中で次第に明らかになる事件の全貌。
そして、人々の野望が渦巻く世界で晴也が目にするのは……

用語解説（前書き）

セプティモゲートに関する設定のコーナーです。
ストーリーが進み次第、順次更新予定。

用語解説

●漆黒の氾濫

西暦2036年6月6日に起きた世界規模での同時多発虐殺事件の総称。この事件によって国際的に妖魔の存在が認められた。

事件発生から3年経った今でも事件の首謀者やその目的、妖魔が出現するポイント等は特定されていない。

このような問題や虐殺を行ったのが突如現れた妖魔ということもあり、遺族への保証が充分に行われているとは言いがたい。

そのため、遺族による各国政府への抗議団体や反政府組織が各国で乱立しているのが現実だ。

国連の発表によると全世界で死者約5万人、負傷者不明となっている。

●妖魔

漆黒の氾濫をきっかけに人間の世界へと現れた異形の存在。姿形や性質は伝承上の妖怪や悪魔と酷似している。

人間世界に現れた目的や、虐殺行為に至った理由は不明。

夜間に活発に活動するが、それが即ち日中に活動するのが不可能ということではない。

人間の兵器は殆ど通用しない。魔能者の攻撃のみが通用するとされている。

陰陽師や鬼神使いが使役しているものも、定義上は妖魔ということになる。

また、その性質によって荒妖魔あらようまと和妖魔にぎようまに分類される。

人間と敵対する妖魔の総称が荒妖魔で、人間と比較的友好的な関係を築いているものの総称が和妖魔である。

●魔能者

妖魔から受けた傷が原因で、何らかの能力に発現した人間をこう呼ぶ。

妖魔から傷を受けること自体が、世間から忌み嫌われているために必然的に魔能者も忌み嫌われている。

発現する能力は主に、巫女、陰陽師、鬼神使い、魔術師などのような非科学的なものである。

魔能者も傷によって2つに分類され、それぞれの傷はV字型のものが解傷、X字型のものが封傷ふうしょうと呼ばれている。

また、能力の発現には条件があるとされていて、

- ・傷を持つ者がその場に同時に2人以上存在すること。
 - ・傷の種類が共通していること。
 - ・辺りに妖魔がいること。
- という3つの条件が挙げられる。

●エクトプラズム発光

魔能者の感情が昂ぶった状態や、能力発動時に見られる現象。

エクトプラズム発光が起きている間は周囲の霊力バランスが崩れるため、妖魔を呼び寄せてしまう。

傷から緑色の光が放たれ、時間の経過と共に身体中へと広がっていく。

エクトプラズム発光に全身を覆われた魔能者は最悪の場合、妖魔の依り代とされることもある。

スピリチュアリズムにおけるエクトプラズムが語源であり、妖魔の謎を解く鍵として調査組織から注目されている。

組織・国家（前書き）

セプティモゲートに登場する組織や国家を解説するページです。順次更新予定

※この作品はフィクションであり、実在する団体や組織、人名、地名等とは関係がありません

組織・国家

●日本合衆国

西暦2020年、旧大阪府を中心に京都府、奈良県、兵庫県、滋賀県、和歌山県の二府四県が関西州として独立したことをきっかけとして起きた改革で成立した。

関西州の独立後、相次いで独立運動が起こり最終的には奥州、羽州、信州、越州、九州、関西州の六州と、北海道、東海道、山陰道、山陽道、南海道の五道が発生した。六州は主に改革派の立場を取り、五道は主に保守派の立場を取る。

合衆国改革によって中央に集められていた権利は各道州の議会に分散され、合衆国法や予算の制定の為には11の道州議会の内、過半数の賛成を得なければならない。

形式上の国家元首は天皇となっているが、実際に権力を掌握しているのは合衆国大統領である。この大統領は4年に一度、各道州議会の議長から選ばれる。

旧都道府県名は例えば、関西州大阪地方というように、地方を表す名として残っている。

正式名称は日本合衆国であるが、公の場を除き日本と呼称されることが多い。

●アメリカ合衆国

漆黒の氾濫において最初に妖魔の存在が確認された国。

各国政府との協力によって、ニューヨークに国連対妖魔組織クルセイダーの本部が置かれている。

日本合衆国、中華合衆国と西暦2025年に合衆国協定を結び、合衆国連合に参加。

●中華合衆国

西暦2022年に日本に続いて革命によって合衆国制度が導入された。中華人民共和国時代の省がそのまま州として存続している。なお、旧チベット、旧内モンゴル自治区は革命の際に革命勢力の手によって中華人民共和国からの独立を果たした。

日本、アメリカと合衆国協定を結び合衆国連合に参加している。

●企業国家 パンドラ

世界有数の大企業「ヴェルレーヌカンパニー」によって統治されている国。国土は太平洋上のミッドウェー諸島近海に浮かぶ、主島プロメテと副島エピメテ。プロメテが人工島であり、エピメテがメガフロートである。

ヴェルレーヌカンパニーは軍需産業と科学産業によって発達した会社のため、パンドラの主要産業もまた軍需産業と科学産業である。国民のほぼ全てがヴェルレーヌカンパニーの社員とその家族。

世界有数の科学力を持つパンドラは、国連から妖魔の調査を委任されている。

●クルセイダー

国連によって設立された対妖魔組織。現行の兵器が妖魔に通用しないため、構成員の殆どが魔能者である。

傷を持つ者が自分が忌み嫌われているため、クルセイダーも畏怖の対象となっている。

●ヴェルレーヌカンパニー

250年前にヨーロッパで、ルシャノー・ヴェルレーヌが興したヴェルレーヌ商會が母体になっている。

●菩提教

ボーディによって開かれた世界三大宗教の一つ。苦行の果てに、悟の境地に至ったボーディが紀元前五世紀にインド北部で開いた。

●聖十字教会

世界三大宗教の一つ。

聖なる犠牲を自ら受け入れた聖者クライストの従者たちがエルサレムで開いた宗教。

中世の宗教改革によって、クライストの教えと旧約聖書を教義とし、最後の審判にて主の元へ至ることを目的とするメサイア派と、新約聖書を教義とし、エデンやイデア界などの伝承上の聖地へと至ることを目的とするイデア派とに分かれた。

●ナビー教

預言者ナビーとナビーに予言を与えた唯一の神のみを信仰する宗教。

聖地は聖十字教会と同じく、エルサレムとされている。

預言者ナビーが残した予言書が教典。

能力解説（前書き）

セブティモゲートに登場する能力を解説するコーナーです。順次更新予定。

能力解説

●陰陽術おんみょうじゅつ

陰と陽の反する属性の支配、周辺に存在する木・火・土・金・水の五要素（五行）を増幅・半減させる術や、式神・人形などに代表される陰陽師特有の術。

陰陽のバランスのコントロールによってバランスを陰の方に傾けると妖魔の力が強まり、陽の方に傾けると妖魔の力が弱まる。

陰の方に傾いた状態を『陰偏』、陽の方に傾いた状態を『陽偏』と呼ぶ。

五行の増幅の際には五行思想における『相生』という考え方が適用され、半減の際には『相剋』という考え方が活用される。

単純に目的の要素のみを増幅・半減させることも可能ではあるが、『相生』『相剋』の関係を併用することによって効率的に属性の増幅・半減が行える。

・相生 「木は火を生じ、火は土を生じ、土は金を生じ、金は水を生じ、水は木を生ず」という関係。例えば火の要素を増幅させる場合には、同時に木の要素を増幅させればよい。

・相剋 「水は火に勝ち、火は金に勝ち、金は木に勝ち、木は土に勝ち、土は水に勝つ」という関係。例えば火の要素を半減させる場合には、同時に水の要素を増幅させればよい。

●巫女術みこじゅつ

一時的に神を自らの身に宿す『神降し』を行うことで妖魔の弱点を探ることや、弓等の武器で妖魔にダメージを与えることができる。神降しの際にモーションを必要とするので隙が多いが、一時的とはいえ神の力を宿すので効力は大きい。

● 靈力術 れいりょくじゅつ

自らの靈力を人工物に宿すことで、妖魔にダメージを与えられるようにする術。

刀や弓、銃などあらゆる物に靈力を宿すことができ、その対象に応じて靈力〇と呼ぶ。

巫女術と比べると発動までの時間がごく僅かなので隙は少ないが、効力は術者の靈力に大きく影響される。

● 行操術 ぎょうそうじゅつ

五要素を操る術。周辺に存在する五要素を材料に術を発動するため、周辺の要素の状態に応じて効力の変動が生じる。

また、術のコントロール精度は術者の集中力に左右される。

通常、1つの要素しか操ることができないが、稀に2つ以上の要素を操ることができる者もいる。より強力な集中力が必要とされるので、扱える者は少ない。

● 属操術 ぞくそうじゅつ

陰と陽の属性を操る術。通常、妖魔の攻撃は陰の属性を帯びているため、その相殺に陰の属性を使用する。

また、妖魔の苦手とする陽の属性を利用することによって妖魔にダメージを与えることができる。

● 鬼神術 きしんじゅつ

鬼を使役する術。水鬼、風鬼、土鬼、火鬼、金鬼、隠形鬼などの鬼を使役できる。

木の要素を代償に鬼を異界から呼び出す。木鬼が存在しないのはそのため。

呼び出した鬼は、自らの力で対応した要素を生み出すことができる。

また、鬼神術によって使役された鬼の操る術は行操術と酷似している。

●忍術にんじゅつ

忍びが使用する術で、主に遁術が使われる。遁術というのは、逃走用の術のことである。

術は五行に対応していて、行操術同様に周辺に存在する五要素を元に発動される。

本来の用途とは異なるが、攻撃に転用することもできる。

第1章 麗しき射手（1）

突如、インターホンが鳴り響いた。狭い家の中に軽快なメロディが流れる。

木造の古びたアパートには不釣合いな『エリーゼのために』のメロディーだ。

「阿倍野君！ また寝坊してるんでしょ！！」

その少し後に、女の声が聞こえてきた。透き通った綺麗な声。

女子高生ほどの年齢、そう推測される。

どうやらドアの向こうに誰かが来ているらしい。

起きたばかりの家主の少年は寝ぼけ眼をこすりながら、鉄製の玄関ドアに取り付けられた覗き穴から声の主を確認しようと顔を近づけた。

夜の間に冷えたドアが頬に当たり、冷たさが衝撃となって皮膚、神経を経て脳を直撃する。

そのおかげで今まで少年を襲っていた眠気は一瞬にしてどこかへと吹き飛ばされた。

気を取り直して再び覗き穴を覗く。少年の目に飛び込んで来たのは、制服に身を包んだ少女の姿だった。

それを見て少年は慌てて返事をする。

「……ごめん、委員長。今日も寝坊しちゃったみたいで……」

少年は申し訳なさそうにボソリと呟いた。

今日も、という言葉から普段も同じような状況なのだろう。

「もうっ！ さっさと着替えて出て来る！！ そ・れ・に！ いつ

も言ってるでしょ、名前で呼んでって。中野ほのかって名前がちゃんとあるんだから」

ドアを隔てて少年と会話している少女は、中野ほのかと名乗った。少年の言葉から察するに、少女はクラスの委員長を務めているようだ。

少年が部屋から出て来るのを待っている間に勉強でもするのだろうか、ほのかは手提げタイプの茶色い鞆から分厚い参考書を取り出した。

”必携 高校数学指南書”と青い表紙に黒い文字で書かれている。ドアの右隣に鞆を置くとその右隣に座り込んで参考書のページを繰り、付箋を頼りに目的のページを開いた。

家主の少年、阿倍野晴也あべのはるやは釜村荘という名の、築30年の古びたアパートの302号室を借りて生活していた。

中学校卒業と同時に、現在通っている雷同高等学校らいどうに進学するために親元を離れて1人暮らしをすることとなり、この部屋を借りているのだ。

ちなみに、このアパートの各部屋には、トイレ・お風呂・キッチン・洗濯機・テレビ・エアコン・冷蔵庫などの必要最小限の物は備えられている。

この部屋の間取りは、玄関に入って右手側にキッチン、左手側に靴箱、そして同じ並びにトイレとお風呂も並んでいて、キッチンを通り抜けた先には6畳ほどの和室がある、といった感じだ。

？
ほのかが参考書に目を落としてから約五分後。鉄製の玄関ドアが開く音がした。

「待たせてごめん……」

謝罪の言葉とともに、制服に身を包んだ晴也が部屋からおずおずと出て来る。白い半袖のワイシャツとグレーのスラックス、それにネクタイを身につけて。

「やっと出てきた」

晴也の目に、ドアの側に座り込んだほのかの姿が飛び込んで来る。襟が丸みを帯びているのと、ボタンの配置が異なっていること以外は男子の物と同じワイシャツとグレーのスカート、リボンを身につけたほのかの姿が。

ほのかは晴也を確認すると参考書を鞆にしまってから立ち上がった。

「朝ごはんまだ食べてないんでしょう？ オニギリ持って来たから食べる？」

「せっかくだから貰うよ」

ほのかは晴也の言葉を聞いて鞆の中からタッパーを取り出す。透明なタッパーで、中に大きいオニギリが2つ入っているのが見える。ほのかはタッパーの蓋をとって晴也にオニギリを見せた。

「朝早くから頑張って作ったんだから味わって食べてよね。そうそう、海苔が巻いてあるのが梅干しで巻いてないのがおかだからね」

そう言うほのかはどこか誇らしげだった。えっへん、という言葉が聞こえてきそうな、そんな感じだ。

晴也は迷わずに海苔の巻かれたオニギリ——つまり梅干し入りのオニギリ——を手に取ると、すかさず口に運ぶ。

海苔の膜が破かれ、米粒同士の結合が解かれ、口の中に梅干の酸味とほのかの甘みが広がる。

この味は……ハチミツ梅、だろうか。

「やっぱり梅干しから食べたか、私の予想通りだね!!」

ほのかの顔には満面の笑みが浮かべられている。それと一緒に頬もほんのりと赤く染まっている。

味の感想のかわりにニッコリと笑って返す。

「おかかも食べる？ あ、でも……そろそろ時間だから歩きながら食べたなら？ ラップもあるし」

これまたほのかは鞆からラップを取り出すと、オニギリを包んで晴也に手渡す。

用意周到だな、と晴也は思う。

オニギリ然り、ラップ然り。

まるでどこかの猫型ロボットか、叩くとクッキーが出てくるポケットのようだ。

「魔法のポケットみたいだね……」

呆れているのか、感心しているのかわからないような口調で言葉を漏らした。

「備えあれば憂いなしって言うじゃない？ だから、ね」
？

中野ほのか。彼女は晴也と同様、私立雷同高等学校に通う2年生だ。

そして、晴也と同じ2年3組に所属している。
彼女自身気づいてはいないが、多くの男子から好意を抱かれてい

る。

端正な顔立ち、雪のように白い肌、清楚な雰囲気漂わせるセミロングの艶やかな黒髪。そのようなものが男子を惹きつけるのだろう。ちなみに、1年の頃は多くの男子から言い寄られていたが、2年になってからはその回数がめっきり減っている。

恐らく、阿倍野晴也と中野ほのかが付き合っているという誤解^{ミソト}からだろう。

そのようなこともあって、男子から阿倍野晴也へ妬み、羨望といった負のオーラが籠められた視線が注がれていることもあるのだが、晴也自身それに気づいているということはない。

晴也に対してここまでしてくれる中野ほのかであるが、晴也と幼馴染や恋人などといった特別な関係ではない。

つい4ヶ月ほど前に知り合ったばかりである。1年生のときはお互い違うクラスだったので面識もなかった。

それなのに、この状況なのは阿倍野晴也の寝坊癖が原因だ。

1年生の頃、晴也は寝坊癖のせいで遅刻することが多々あった。

無論、毎日遅刻していたわけではない。月に3、4回といった頻度だ。

その度に晴也の担任は頭を抱えていた。

そして、幸か不幸か。この教師は2年生でも晴也の担任となってしまうたのである。

晴也の寝坊癖をどうにかしようと、担任がクラス委員長を務める中野ほのかに意見を求めたのだ。「どうすれば阿倍野晴也が遅刻しないですむのだろうか」と。

そこではのがが提案したのが自分が毎朝晴也を家まで起こしに行く、というものであった。

そればかりか、最近は朝ご飯も届けているようだが。

幸いなことにほのかが起こしに来てくれるようになってから寝坊が原因で遅刻するということはなくなった。

言葉に出しはしないものの、それに関して晴也はほのかに感謝している。同時に、今のようになんか面倒見が良すぎるのでは？ とも思っているが。

？

2人は釜村荘を後にすると、普段通学に使っている道路に出た。この道路は軽自動車が対面ですれ違うのがやっとな程細い。だが、この道を車が走ることは稀なので、それほど問題視はされていない。ここ、釜村荘から2人の通う雷同高校までは約十分程の道のりだ。前述のとおり車の通行が少ないため、2人は横に並んで歩いている。

「そう言えば明後日、学校で模試があるんだっけ……」

ほのかが参考書を見ていたので思い出したのだろう。晴也はほのかに尋ねた。

「うん、明後日だよ。もしかして……勉強してなかったりするの？」

ほのかが訝しげに聞き返す。

「ううん……そうじゃないんだけどさ」

晴也が濁すように言ったためにほのかの心の中には疑念の心が生まれる。

「じゃあ、どうということなの？」

ほのかの言葉からその心を察知したのか、取り繕うように晴也は弁解した。

「僕は委員長ほど頭良くないしさ……将来何になりたいかもよくわからない。そんなので模試を受けても意味があるのかなって」

横でほのかの艶やかな長い黒髪が上から下へ縦に揺れたのが晴也の目に留まった。

つまり、ウンウンと頷いているのだ。

「わかるよ、それ。私だってそんなに頭が良いワケでもないし、将来の夢もハッキリわからないもん」

「委員長……」

「だから、そんなことで悩んでちゃダメだからね!!」

そう言うとはのかは右手に持っていた鞆を両手で身体の前に持つと、晴也の方を向いてニッコリと微笑んだ。

「そうだね、ありがとう委員長」

「どういたしまして！　そうだ、気分転換にオニギリ食べたら？　まだ残ってたでしょ」

ほのかのその言葉でオニギリを持っていたことを思い出す。

晴也は鞆からラップに包まれたおかかオニギリを取り出すと、それを一気に頬張った。

おかかの味が口の中を制圧していく。

そうして歩いていると、いつのまにか大通りに出ていた。

学校に繋がる大通りだ。この辺りからは学生の姿が多く見受けら

れる。見知らぬ顔も、見知った顔も。

「よっ、お2人さん。今日も仲良く登校かい？」

後ろからよく聞き慣れた声が聞こえてきた。クラスメイトの男子、かざまはやて風間疾風の声だ。

晴也は反論しようとして少し口を開いたが、それよりも先にほのかの
声が聞こえてきた。

「やめてよ、風間君。安倍野君と私はそんな仲じゃないんだから！
私はただ……先生に頼まれたから安倍野君の家まで起こしに行っ
てあげてるの！！」

語尾に『！』が付いていてもおかしくないような感じで、多少感
情的になりつつもほのかは風間の言葉を否定した。

それを聞いて晴也はホッと胸を撫で下ろす。ほのかが自分の言い
たかったことを代弁してくれたからだ。

委員長と自分はそんな関係じゃない。自分に寝坊癖があるから起
こしにきてくれていたただけだ、という見解はどうやら晴也とほのか
の間で一致していたらしい。

しかし、否定するとき感情的になるのはどうだろうか、と晴也
は思う。

それじゃあまるで……

「そうだよね、安倍野君？」

そんなことを考えているときにいきなり声をかけられた為に、「
……へ？」などという腑抜けた返事になってしまう。

「どうしたの、安倍野君？ ボーッとして」

どうやら晴也がブーツとしていたように誤解されたい。誤解されたままというのも癪なので反論する。

「僕はブーツなんてしてないよ。風間がいきなり変なこと言うから……」

咄嗟に後ろにいる風間に責任を転嫁する。

いきなり責任を転嫁された風間は驚いた素振りを見せつつこう言った。

「おいおい……俺のせいだよ？ ま、いや。俺、国語の課題出さないといけないから先に行くぜ」

そう言い残して風間は走り去ってしまった。走り去る風間の姿が晴也の目にはまるで風のように見えていた。

また、2人きりである。

「さすが、学年1の運動神経だよ」

晴也は、もう見えなくなった風間に向かって小さく呟いた。

「何か言った？」

晴也の呟きが聞こえたのか、ほのかが聞き返した。

「いや、何も」

？

風間が2人と別れてからしばらく経った後だ。

「ねえ、安倍野君……」

唐突にほのかが神妙な面持ちで隣にいる安倍野晴也の名前を呼んだ。

普段とは違う声色。それ故にほのかの言葉に違和感を感じてしまう。

自分が模試のことを口にしたとき、ほのかも同じような気持ちだったのだらうという推測のもと、名前を呼び返す。

「どうしたの、中野さん？」

このとき晴也は無意識の内に、ほのかのことを苗字で呼んでいた。まったくの無意識の内に。

それに気づいたかどうか定かではないが、ほのかが続けるように言う。

「安倍野君は私のこと……」

その言葉が境だった。隣を歩いていた筈のほのかの足音が聞こえなくなったのだ。

後ろを振り返ってみると、ほのかは街路樹の下で立ち止まっているではないか。

それを見てすぐに晴也は慌ててほのかのそばに駆け寄る。

途中、何かにつまづいて転けそうになったがなんとか体勢は持ち直した。

「どうかしたの？」

晴也は普段とは違うほのかの行動に疑問を抱きつつ、そう聞いた。

だが、ほのかからの返事は無い。

2人の間に静寂が訪れるが、それもすぐに破られた。

街路樹からアブラゼミの耳障りな鳴き声が聞こえてきたからだ。それが聞こえ始めてから、再びほのかは言葉を紡いだ。「私のこと……どう思ってるの?」と。

俯き気味に言ったので、晴也からはほのかの表情が見えない。それでも、声のトーンから明るい表情ではないと察せられる。

「どう思ってるのって……」

再びの静寂。2人の間に静かな時間が流れる。

それを破ったのはほのかの言葉だ。

「さっき私はああ言ったけど、安倍野君はどう思っているの?」

ほのかは晴也により詳細に尋ねた。

先ほどの風間の言葉に何か思うところでもあったのだろう、それ故の質問と思われる。

「家まで起こしに来てくれてること?」

「そう、そのこと。もしかして、迷惑とか思ってる?」

ほのかは今まで俯かせていた顔を上げて、晴也の目を見つめる。

つぶらな瞳が晴也の瞳を射抜くように見つめる。

いきなり目を見つめられた晴也の胸はドキンと一度強く脈を打った。

それ以降、強く脈打つことはなかったが以前より脈拍が速いのが分かる。

「ど……どうして迷惑なんて思うんだよ。委員長のおかげで遅刻しなくなったし感謝してるよ。それに……」

少しどもりながらの返答となってしまった。だが、いきなり目を見つめられたのだから仕方ないだろう。

これ以上ほのかの瞳を見ていたら頭がおかしくなりそうだと思い、目を逸らそうとするが、ほのかの雪のように白い頬がそれを邪魔する。

晴也の視線はほのかの頬に移動したに留まった。

「それに？」

そう言いながら、ほのかは晴也との距離を詰めた。

そうすると、自然に2人の顔の距離も近くなるというものである。晴也の気持ちとは裏腹に、否が応でもほのかの瞳が視野の中央へと迫ってくる。

「オ……オニギリも、お……美味しかったし」

またもやどもりながらの返答になる。

自分は悪くない。何故かこの様なことをしてくるほのかがいけないんだ、と思うことによって晴也の精神はなんとか保たれている状態だ。

「……良かった。迷惑じゃなかったんだね。風間君と話してる時さ、安倍野君すぐに返事してくれないから怒ってるのかと思ったんだ。もしかして、私があまりにもお節介すぎたから」

「お節介なんてとんでもないよ。毎朝起こしにきてくれるのは嬉しいし……中野さんとなら誤解されても……」

晴也は思わず余計なことまで口走ったことに気づいて、手で口を押さえつける。

勿論、それで一度口から出した言葉が元に戻ることは無いのだが。当然のようにほのかにもその言葉は聞こえていたワケで。

「えっ……!?!? ちょ……ちょっと晴也君!! じゃなかった……
安倍野君!! いきなり、な……何を……!」

晴也の言葉に動揺を隠せないほのかは口をパクパクさせながらそう言った。

隣を歩いて行く雷同高校の生徒にその様子を目撃されたりもしていたが、このような状態ではそれに気づきもしない。いや、できないだろう。

「な……なんでもないよ!! ！ それより委員長、ちょっと落ち着こうよ」

晴也のその言葉で我に帰ったほのかは即座に頭の中を整理した。晴也の言ったこと、自分の言ったこと。そして、自分の取った行動を。

全ての整理が終わると、ほのかの頬は薄い桜色に染まっていた。

「うん、落ち着いた。落ち着いたよ、安倍野君。いきなりあんなこと言うなんてビックリしたよ」

ほのかは最後のほうでほっぺたをぷうと膨らませてそう言った。素振りの怒っているモーションだろうが、その様な感情は感じられない。

「ビックリしたのは僕のほうだよ。まさかあんなことを……」

「えへへ……でも、嬉しかったよ。その……私も……いや、やっぱりなんでも無い！」

ほのかの頬が桜色に染まっている。

そして、それをアクセントとして天使のような微笑みが浮かべられている。

「……そうだね。それじゃ、学校行こうか」
「うん！」

2人は再び学校へと向かって歩き始める。

2人の距離は僅かではあるが縮まっている。ほんの僅かだが。

こうして、安倍野晴也の一日（日常）は始まりを迎えた。

だが、それと同時に長きにわたる戦いの日々（非日常）も始まりを迎えたのである。

第1章 麗しき射手（2）

3時限目。この時間は学生にとって空腹感を感じ始める時間であり、昼食が恋しくなり始める時間だ。

また、だんだんと空気が熱せられて気温が上がってきて、集中力が削がれ始める時間でもある。

阿倍野晴也の所属する2年3組は火曜日の3時限目と木曜日の2限目に体育が割り当てられていた。

最近ではセミも鳴き始め、身を焼くような暑さが感じられる。

当然、こんな暑い中グラウンドで陸上競技などできる筈もなく、雷同高校では先週から体育では水泳をするようになったのだ。

今日、7月12日は火曜日だ。つまり、3時限目の授業は体育ということだ。

そして今、ちょうど2限目が終わり休み時間へと突入したばかりだ。

しかしながら、休み時間といっても次の授業が体育のため、否が応でも着替えの時間に充てなければならぬ。

授業を終えたばかりの戦士たちに休息は許されないということだろうか。

雷同高校の校則には更衣についてこうある。

『特別な事情が無い限り、原則として男子は自教室で、女子は更衣室を更衣場所とすること』と。

その校則に則り、阿倍野晴也は自教室で水着へと着替えていた。

プールという物はそれほどにまで人の心を魅了する物なのだろうか？

最前列の自席から後ろを見渡して、周りの男子の様子を見た晴也はそう思った。

普段からやんちゃな者はそれ以上に、大人しい者ですら気分が高揚しているのかやけにテンションが高い。

中には意味不明な奇声を発する者までいる。

プールがそんなに楽しみなのか、あまりの暑さに頭がおかしくなったのかは分からないが、ここは関わらないのが吉だろう。

後ろは振り向くまい。そう決めて着替えに戻った。

晴也がワイシャツを脱ぎ、上半身がアンダーシャツだけになった頃。

突然、後ろのほうから耳を疑う言葉が聞こえてきた。

「なあ、女子の水着姿どんなのか楽しみじゃないか？」

「そうだなあ。この前は男子だけだったし今日こそは、な。まあ、どうせただのスク水だろうけど……」

机の上に両手をついて、俯き気味になりながら溜息をつく。

ウンザリな気持ちと、侮蔑の気持ちとが縋い交ぜになった溜息だ。もしかしたら自分への失望も含まれていたかもしれない。

女子と聞いて今朝のほのかとのやり取りを思い出した自分への。

どうして男にはこんな変態的な奴が多いんだ、と思いながら着替えを再開した。

さっさと着替えてこんな教室からは逃げ出そう。

そう考えていたのだが、どうやら着替えすらまともにさせてもらえないらしい。

「よっ、阿倍野ちゃん」

アンダーシャツを脱ぎ去った時に、またもや後方から声が聞こえてくる。

この声は今朝も聞いたあの声。今朝の出来事の元凶ともいえる風間疾風の声だ。

風間の顔を見ると、いや声を聞くだけで嫌でも今朝のことが思い出される。

「おい風間、今朝はお前のせいで散々な目に遭ったんだぞ。どうしてくれるんだ？」

無論、この様なことを事実を知らないものに言っても意味はない。だからと言って、今朝のほのかのことを風間に言うワケにもいかない。

あんなことが知れたら、自分が痛い目を見るだけなのだから。

「んなこと言われてもねえ……具体的にどんな目に遭ったっての？」

至極当然の反応である。風間はただ「よっ、お2人さん。今日も仲良く登校かい？」と言っただけであり、それを誤解したのは晴也とほのかの2人なのだから。

それに、あの話になったのも風間がいなくなっただけのことなので、どんな会話がなされたのかを風間が知る由も無い。

「いや……それはだな……」

「なるほど、そういうことか。まったく……2人とも鈍感なんだな」

晴也はまだ質問に対して何も答えていないというのに、風間は1人で納得している。

おそらく、晴也の反応からどの様なことがあったのか薄々勘付い

ているのだろう。

「なあ、阿倍野君さあ……」

笑みを浮かべた風間はそう言ながら晴也の目の前に来ていた。

何かを言いたかったのだろうが、突然言葉が途絶えた。

風間は棒立ちになって、晴也の左の胸を凝視していた。

その視線の先には、5センチメートルほどのV字型の傷があったのである。

まるで何かによって付けられたような明らかに異質な傷が。

「な……なあ、阿倍野。今日初めて気が付いたんだけどさ、その傷、どうしたんだ？」

風間は晴也の左胸の傷を指差しながらそう言った。

僅かではあるが、風間の声が震えているのが感じられる。

幸いなことに周りが騒がしいので、風間の声は晴也にしか聞こえていない。

「ああ、これね。小さい頃に怪我したんだと思うよ」

しかし、これは嘘だ。

この傷は3年前の6月6日、つまり？漆黒の氾濫？のときに負った傷なのである。

その日の夜、偶然外に出歩いている時に妖魔と遭遇し、襲われた時に負った傷だ。

何故、阿倍野晴也が嘘をついてまでその事を隠し通そうとしたのか。それには理由がある。

妖魔に襲われた人間は世間から？傷者？と渾名され、蔑まれ、忌み嫌われているからだ。

妖魔に襲われるのは日頃の行いが悪いからだ、だから罰が当たった。などという理由をつけて。

つまり、妖魔に襲われたという事実だけでまるで罪人であるかのような扱いを受けなければならないのだ。

そのため、晴也のように妖魔に襲われたことをひた隠しにして生きていく人々は相当数いると考えられるのだ。

「そ……そうか、なら良いんだけどさ。もし妖魔に襲われた傷だったらさ……」

返事を感じからずると、ある程度は子供の頃の傷ということに納得してもらえたらしい。

だが、まだ少しは疑われているかもしれないが。

「風間……」

不意に目の前にいる友人の名を呟いていた。

友人を騙したという罪悪感から、心が重たくなる。

しかし、その後続く風間の言葉に晴也の心は救われる。

「ま、でも俺はそんなことで差別するのは良く無いと思うけどな。俺たちだっていつ妖魔に襲われるかわからないんだし」

思ってもいなかった言葉だ。風間がこんな風に考えていたとは。事前に分かっていたいれば嘘をつくこともなかったのかもしれない。そう思うと悔やまれる。

いずれ、風間には本当のことを話すかもしれない。晴也はそう思った。

晴也のそのような思考を奪って行ったのは、「そう言えば……今日の体育は鬼島おにじまの担当だったよな？」という風間の言葉だ。

？鬼將軍？と生徒から恐れられている体育教師、それが鬼島だ。この学校に勤める教師の中で、生徒から恐れられている教師はほぼ漏れなく鬼〇〇といった渾名で呼ばれている。だが、苗字に元々？鬼？と入っているこの教師は例外だ。

体育の授業中、常に竹刀を携えていることから、？鬼將軍？との渾名で呼ばれている。

この教師が常に竹刀を携えているのは、剣道部の顧問という職業柄からだろう。

授業に遅刻や忘れ物をした場合、その頻度によっては竹刀で殴打されることもあるらしい。

それ故に、本来ならばこのように悠長にしている場合ではないのだ。

一刻も早く水着に着替えて、その上から体操服を纏って体育館地下のプールへと行かねばならないのである。

それを風間がクラスの皆に伝えると、今まで騒がしかった教室は嘘のように静まり返った。

皆、黙々と着替え、大急ぎで教室を飛び出す。

阿倍野晴也もその中の1人だ。

慌てて教室を飛び出したのは良かったのだが。不運なことにそのすぐそばを女子生徒が歩いていた。

廊下に飛び出した晴也がそれを知っている筈もなく、対する女子生徒もいきなり飛び出してくるなどとは考えてもいなかったのだらう。

大きな音が廊下に鳴り響いた。それから遅れて軽快な音が鳴り響く。

廊下には衝突して倒れた2人の生徒と、女子生徒の手から零れ落ちたりコーダーが転がっている。

いきなりの音に周りの目が2人の方へと向けられる。しかし、ぶつかったただけだと分かると、視線は元の場所へと戻されていった。

どうやら柱に頭をぶつけたらしい。後頭部が盛り上がってたんこぶになっている。

女子生徒の方は尻餅をついただけで済んだらしい。晴也が眼を開けて前を見ると、腰に至るほどの長い茶色の髪の毛をした女子生徒が地面に尻餅をついていた。

「あっ……ゴメン……」

女子生徒の方を見ながら謝罪の言葉を述べると、女子生徒が晴也の方を指差していた。

晴也から少し離れた場所、指さされたそこにはリコーダーの入った青いバッグが転がっていた。

先ほどの衝突で女子生徒が落としたものだ。

つまりこれは……拾ってくれということなのだろう。

そう解釈してリコーダーを拾うと、ぶつかった女子生徒に手渡そうと距離を詰めた。

拾った時に、バッグに書かれた名前が目に入った。かみむらあずさ？ 神村梓？ と書かれていた。

「ホントにゴメン……急いでて、つい」

神村梓と思われる女子生徒は晴也がリコーダーを拾っている間に立ち上がっていたようだ。その目の前に立って、頭を深々と下げて誤ってからリコーダーを手渡す。

「ホントのホントにゴメン！ 怪我とか……ないよね？」

「別になんともないよ。それより、自分の頭のことを気にしたら？」

そう言い残すと、女子生徒は足早にその場を立ち去って行った。

これが、阿倍野晴也と神村梓の初対面であった。

最悪の初対面。後から晴也はこの出会いをそう称することになるのだった。

第1章 麗しき射手(3)

「とんだ災難だったな、あ・べ・の君！」

茶化すようにそう言ったのは、阿倍野晴也の友人である風間疾風だ。にこやかな笑顔を浮かべて晴也の方を見ている。

他のクラスメイトが水泳のテストを受けているのをプールサイドから見守りつつ、阿倍野晴也と風間疾風は話しをしていた。

周りの男子が落ち込んでいるように感じられるのは、今日もまた女子がプールに入っていないからだ。

出席番号1番の晴也は既にテストを終えている。あとは皆が泳ぐのを見ているだけだ。

時折、泳いでいるクラスメイトのクロールの手の動きで発生した水飛沫が体を濡らしているが、大した問題ではない。夏だというのに、暖房の効いたここではすぐに乾いてしまうからだ。

ここ雷同高校のプールは体育館の地下にあるので、温水プールとなっている。そのため、暖房設備が導入されているのだ。

極端な話だと、真冬にプールに入ることにも可能ということになる。無論、いくら生徒から鬼將軍と恐れられている鬼島でも真冬にプールに入るといふ過酷なことは要求しない。

そのため冬場のプールはもっぱら水泳部の独擅場となっている。

「まったくだ。あんなところで女子とぶつかるなんて……」

やれやれ、といった口調でそう言ったのは阿倍野晴也だ。

風間の一言で集合に遅れずには済んだものの、その道中で隣のクラスの女子と激突するという災難に見舞われたのだった。

風間が言う災難とは、つまりそのことである。

「でもさあ、相手神村さんじゃん？ なんつーか、羨ましいねえ」

相変わらずのにこやかな笑顔で晴也にそう言った。
やはり先ほどと同じように、茶化するような調子だ。
だから、風間としても本気で言っているわけではないのだろう。
しかし、晴也は風間の羨ましいという言葉に疑問を持ったのだっ
た。

「どういうことだよ、それ。まず、神村さんだっけ、それってさっ
きぶつかったあの女子のことか？」

晴也は自分の中に浮かんだ疑問を解決するために、風間に質問を
した。

あくまで、疑問を解決するためだ。興味を持ったなんてことでは
断じて無い。はずだ。

「神村さんのこと知らないなんて、もしかして阿倍野、そっち方面
疎いのか？」

すぐには期待していた答えは返ってこなかった。
それどころか、またもや茶化するようなことを言っているではない
か。

「ほっとけよ！」

「まあまあ、そう怒らずに。神村さんってのは、阿倍野の言う通り、
さっきぶつかった人の名前だ。男子の中ではそれなりに人気なんだ
よね、神村さん」

男子の中では、という言葉に何かひっかかる物があった。
それではまるで、女子からは……

「男子の中では？」

風間の言葉によって生み出された新たな疑問を解決すべく、二度目の質問をしたのだった。

しかし、風間から返ってきた答えは晴也にとって見当違いの物であった。

「ああ。なんでもあの童顔フェイス、いやロリフェイスと言うべきか！？ あれが男子を虜にしているらしいぞ」

晴也が言葉の裏に秘めた意味を汲み取った答えではなく、言葉の表面上の意味だけを読み取った答えだったからだ。

晴也が本当に聞きたかったのはこんなことではなかった。

「ロリフェイスって……お前はどこで人を判断してるんだよ」

しかし、このまま会話を途切れさせては本当に聞きたかったことが聞けないと思い、仕方なく会話を続けるのだった。

「待て阿倍野。俺がロリフェイス好み、だなんて一言も言っていないぞ。逆に聞くがお前はどこで人を判断してるんだよ？」

「少なくともお前みたいに顔だけで判断したりはしないけどな。やつぱり……性格、とかかな」

このような会話をする気はなかったのだが、当たり障りの無いように答えた。

こんなことでわけの分からない根も葉もない噂を立てられるのは御免だ。

「なんだよ、純情ボーイでも気取ってんの？」

「純情ボーイって……。そうじゃなくて、僕が聞きたいのは男子の中ではってことはつまり……」

流石にこのままでは埒が明かないと思い、今度は包み隠さずに質問をするのだった。

「ああ、そっちのことか。なんでも1年の頃に何かあったみたいだね」

この何かというのを風間がわざとぼかして言っているのか、それとも本当に分からないのか、晴也はそれを判断することができなかった。

「何かってなんだよ」

もし、風間が何かを隠しているのなら聞いておきたい。そう思っ
てその何かを聞いてみた。が、

「それがさあ……よく分からないんだよね。他の男子も知らないっ
て言うし……」

どうやら、風間も何があったのかは知らないらしい。つまり、分
かったのは男子から人気があるということだけだ。

風間曰く、ロリフェイスが人気らしいが。

「お前でも知らないことあるんだな」

女子のことを聞けば何でも答えると思っていた風間にも分からない
ことがあるとは意外だ。

それほどまでに、神村梓という少女には秘密があるのだろうか。

「いや、別に俺は情報屋じゃねーし……。って、そろそろ俺の番だから行くわ」

どうやら話をしている間に、風間が水泳のテストを受ける番が近づいていたようだ。風間は軽く手を振りながら晴也から離れていった。

「ああ、頑張れよー。って言わなくても風間は学年一の運動神経があるから問題ないか」

離れて声も聞こえないような距離で、風間に聞こえないように晴也はそう呟いた。

「次、風間!!」

鬼島の声がプールの中に響く。密閉されていると言っても過言では無い空間故にその声がよく響き渡る。

鬼島に呼ばれた風間は飛び込み台へと歩いて行き、帽子とゴーグルをあたまに装着して準備をする。

風間が準備を終えたことを確認すると、鬼島は飛び込み台に登る合図の笛を鳴らす。

よくある普通の笛の音色だ。

風間は飛び込み台の上で飛び込みの準備をする。あとは合図の笛が鳴るだけだ。

軽く深呼吸をして、息を整える。

そして、笛が鳴った――

風間の泳ぎは見事なものであった。

スピードと優雅さを兼ね揃えた美しいフォームだ。
不必要な水しぶきは上がらず、動きも滑らかだ。

学年1の運動神経というのは伊達ではないということだろう。
普段、女子のことばかりを話している風間ではあるが、このとき
の風間の姿は素直に尊敬に値するもののように感じられた。

しばらくした後、風間は泳ぎ終えて元いたプールサイドに帰ってきた。

「さすが、やっぱり学年1の運動神経と言われるだけはあるね」

風間の泳ぎを見て、感動すら覚えた晴也は心からの労いの言葉をかけた。

「そんなことないって。父さんも運動が得意だったって言ってたから、ただの遺伝だよ、遺伝」

偶然、運動が得意な親の元に生まれてきた。つまり、運が良かったと言いたいのだろう。

「遺伝だとしても凄いじゃないか」

「でもさあ、遺伝ってことは自分の力で手に入れたってわけじゃないじゃん？ だから、あんまり褒められるのは嫌なんだよね」

晴也が思っていた以上に、風間疾風という男は、自分の力というものに拘るらしい。

できる父親への反発心というものもあるのだろうか。

「でも、俺はいつか純粋な自分の力で1番を取りたいと思っている」

「でもお前、部活には入っていないんだろ？」

こんなにも運動神経がいいというのに、風間はどこの部活にも所属していない。

学年1の運動神経と謳われれば、嫌でも上級生の耳にも入って色々な部活からの勧誘もあったに違いない。

それをすべて断っているということか。

そうまでして、風間が手に入れたと思う1番とは何なのか。それを晴也は知りたいと思ったが、敢えて今は聞かないでおこう、そう決めたのだった。

「何も部活だけが方法じゃないさ。きっと他にも何か方法はあると思う」

「そっか、頑張れ。風間にならいつかきつと見つけられと思うよ、その方法が」

「応援感謝するよ。楽しみに待っていてくれよ？ 俺がその方法を見つけるまでさ」

第1章 麗しき射手（4）

時刻としては午後4時を少し回った頃、2年3組の教室。

「今配ったのは進路に関わる大切な書類だ、なくすなよ。提出は急で悪いが明日の朝だ、忘れるんじゃないぞ」

スーツに身を包んだ、30代と思しき男性がA4サイズの白い書類を配り終わるとそう言った。

その男性は2年3組、つまり晴也の所属するクラスの担任だ。

名は松宮孝介まつみや こうすけといい、教科は倫理科を担当している。ちなみに、妻子持ちである。

晴也はその書類に一度目を通すと、一旦机の中に入れた。

「じゃあ、今日はこれで終わりだ。委員長、挨拶を頼む」

「はい。起立！」

ほのかの言葉でクラス全員が立ち上がる。中には鞆を肩にかけて既に帰る気にいる者や、机に手について少しだらけた様子の者もいる。

少し辺りを見回してから、ほのかは次の号令をかけた。夏と言うこともあり、騒いでいなければいいとの判断から少しの乱れは見て見ぬ振りをした結果だ。

「礼、ありがとうございます」

この礼も最早、形だけのものとなっていた。形式上、言わなければならぬためにスルーするわけにもいかない。

担任も、礼をすることを求めはしないし、強制的にさせたところで意味はないと考えているらしい。

挨拶が終わって少しすると、鞆を肩にかけた風間が晴也の元へと駆け寄ってきた。

「うー、一緒に帰ろうぜ阿倍野」

「そうだな、帰るか」

風間からの帰りの誘いだった。鞆の中を整理してから帰ろうと思っていたのだが、風間を待たせては悪い。仕方なく、整理もほどほどにして帰ることとした。

「じゃ、僕たち帰るから。委員長また明日」

「明日はちゃんと起きて待っててよね。また明日ね、阿倍野君。それに風間君も」

委員長と別れの挨拶を交わし、学校を後にした。

机の中に明日提出の大事な書類を忘れたことに気付かないまま。

朝、学校に来るときには隣にほのかがいるのだが、帰るときはそうではない。

といっても、試験前などは例外だ。ほのかの家で勉強の手伝いをしてもらうために、晴也がほのかの家へ行くことがあるからだ。

しかし、それはあくまで試験前のことであり、普段は専ら風間疾風と帰るのが常だ。

授業で疲れた体を癒すために自販機で炭酸ジュースを買うのが夏場の2人の日課になっていた。

今日もまた、駅前の自販機に寄ってから帰っているのだった。

「新発売のルビーグレープフルーツ味のラムネイドうまいなあ〜！」

そう言ったのは、風間だ。

ルビーグレープフルーツ味という名前を体現するかのような、赤い塗装に、オレンジの曲線がところどころにあしらわれたデザイン
の缶を口元に当てて中身を口の中に流し入れる。

赤い色をした液体が舌の上を通過すると、まず炭酸飲料独特の清涼感がやって来た。

それとほぼ同時に甘みも口の中を満たす。

甘みが通り過ぎたその後、グレープフルーツ特有の苦味が遅れてやって来る。

「この苦味がまた堪らんねえ〜」

顔を見なくとも、言葉だけで風間の幸せそうな感じがよく分かる。

「そりゃよかったな。だけど、こっちのレモンmixコーラもなかなか美味しいぞ」

風間の飲んでいるラムネイド ルビーグレープフルーツ味と同じく、最近発売されたばかりのレモンmixコーラを飲んでいるのは阿倍野晴也だ。

こちらの缶は、涼しさを感じさせる青色の塗装に、レモンを表す黄色いラインが斜めに輪を描くように缶の周りに施されている。

「この前それ飲んだんだけどさあ、確かに美味しいな。後味スツキリ！ って感じ？」

缶を持っていない左手で缶ジュースを飲む動作をしながら風間は

そう言った。

「そうそう。ほんのりとした酸っぱさがいいアクセントになってんの」

そのような缶ジュース談義をしている間に、気が付けば既に晴也の家の近くまで来ているではないか。

話に夢中になりすぎていたか。

「あゝ、もう家か……いいねえ、家と学校が近い人は」

釜村荘の目の前に来た所で、晴也の部屋のあたりを指差しながら風間がそう言った。

両隣の家は住民がいるのか、明かりがついている。当然、晴也の部屋の明かりはついていない。

「お前の家だってここから5分くらいしかかからないだろ。それくらい我慢しろよな」

呆れた口調でそう言いながら、晴也は釜村荘の敷地内へと入っていく。

「へいへい、我慢するとしますか。また明日な、阿倍野」

「ああ、また明日」

2人は軽く挨拶を交わすと、お互い家へと向かって歩き始めた。とはいったものの、晴也の部屋はすぐそこなのだが。

玄関の前までくると、玄関に備え付けられた郵便受けから封筒が

はみ出しているのが見えた。

見えている部分を見る限りでは何の変哲もない、ただの茶封筒だ。大方、どこかの会社や団体の広告だろう。そう思って晴也は封筒を手にした。

手に持ってみても、やはり何も問題はなさそうだ。

しかし、持った感覚だと広告が入ってるわけではないらしい。折り目の僅かな膨らみが感じられないからだ。

明るい方へ向けて透かしてみると、中には封筒より一回り小さな何かが入っているようだ。

「誰からだ？ 宛先も、差出人の名前もなし……か」

誰に言うでもなく、ただそう呟いた。

「ま、とりあえず部屋入るかー」

封筒をズボンの右ポケットに入れると、それと同時に持ち替えるように部屋の鍵を取り出して鍵を開け、部屋に入る。

部屋の中は今朝脱いだ寝巻きが散乱していた。ほのかを迎え来たので急いで着替えたからだ。

「ん、これは洗濯しなきゃな」

鞆を置いて寝巻きを洗濯機に放り込むと、あることを思い出した。昨日の晩から洗濯物を干したままだったのだ。

もう少し早く起きていれば取り込んでから学校に行けたのに。

そう思いながらハンガーや洗濯バサミから衣類を取り外す。

多少シワができているが、気にすることはない。

洗濯物を取り込んだり、寝巻きを洗濯したり、明日の朝出すゴミをまとめたりしていると、既に午後6時を少し回った所だった。夏場なので、外が暗くなるのもそんなに早い時間ではないから気づかなかったのだろう。

窓の外を見ると、昼間に劣りはするものの、まだ明るかった。

数学の宿題をしようと鞆の中を漁っている時だった。

机の中に明日提出しなければならぬ書類を机の中に忘れたことに気が付いたのだ。

幸いなことに、時刻はまだ午後6時13分だ。

3年前の漆黒の氾濫以降に制定された外禁法に定められた外出禁止時間までまだ時間がある。

3年前、漆黒の氾濫が起きたのはちょうど午後10時を過ぎた頃だった。

全世界で5万人もの死者を出したその事件以降、各国では夜間外出禁止法なる法律が定められた。通常これは略して外禁法と呼ばれている。

それには『如何なる理由があろうとも、午後10時を過ぎての夜間の外出は認められない』との記述がある。

妖魔の活動が活発化し始める午後10時以降の外出は法律で禁止されているのだ。

これは、国から国民への警告であり、国が国民にできる最低限の保護だ。

刑法にも同様に定められている為、この外禁法を犯すと罰金等が課せられるということになる。

しかし、肝心の警察官も午後10時には既に勤務を終えて帰宅している、よほどのことがない限り逮捕されたりなどということ

はないのだが。

今の時刻から考えると、外禁法の適用にはまだ4時間近くの猶予がある。

学校に取りに戻るのなら、今しかチャンスはない。

外禁法の存在もあり、午後8時までには正門、通用門ともに閉められてしまうため、警備員もそれと同時に仕事を終えて帰ってしまうからだ。

「仕方ない、取りに行くか……」

帰ってきてすぐに洗濯物を取り込んだり、洗濯をしたりしていたのでまだ制服のままだ。

着替える手間が省けてラッキー。晴也はそう思った。

いつも通りの通学路を歩いて学校へと向かう。朝と違うのは隣にほのかがいらないことだ。

一人で歩くというのは虚しいことだと感じた。普段、登校時はほのか、下校時には風間が隣にいる。

今はその2人がいないのだから、そう感じるのは当然のことだろう。

しかし、そんなことを気にしている暇はない。

早急に学校へと行かねばならないのだ。

学校に着いたのは午後6時27分。1人で来たからだろうか、毎朝学校に着く時間より5分ほど早く着いた。

これは嬉しい誤算だ。

しかし、現実はその甘くはないらしい。晴也が正門に着いた時には既に施錠された後だった。

こうなると通用門から入るしか方法は残されていない。

だが、肝心の通用門が正門の真反対に位置しているのでここから更に歩かなければならない。

心なしか、空が暗くなってきた。

午後10時というのは、妖魔の活動が活発化し始める平均的な時間というだけであり、辺りが暗くなってしまえばそんなことは関係ない。

妖魔に人間のルールを当てはめることがまずおかしいのだから。

通用門にたどり着いたのはそれから5分後の午後6時32分だった。

正門が開いていないというのなら、こちらはもっと人気があってもおかしくなさそうなのだが、人の気配が微塵も感じられない。

それに、通用門も既に閉じられていた。

何かがおかしい、そう感じた。しかし、いつか感じたことのある感覚。それがいつだったのか……

この通用門付近には警備員の詰所が設置されている。そこにいる警備員なら、何かを知っているかもしれない。そう思って晴也は警備員詰所に足を運んだ。

この警備員詰所は役割としては関所のようなものだ。校外からの訪問者に入校許可証の提示を求めたりする場となっている。

もっとも、大概の訪問者は正門を利用する為、ほとんど機能していないといっても過言ではない。

また、この警備員詰所は内部で校内・校外と繋がっており、門を

通らずとも校内に入ろうと思えば入れるのである。

「すみません……」

時間的にはまだ、勤務時間内だ。警備員達の仕事を邪魔しないように申し訳なさそうにそう言いながら警備員詰所のドアを開いた。

そこでもやはり、何かを感じた。これは……気配？　しかし、人間の気配とは異なるものだ。

警備員詰所の中は、一面暗闇だった。

窓ガラスを割って不法に校内に侵入されないように、校外側には設置されていない。それでも、校内側には設置されているので、光が入らないなんてことはないはずだ。

当然ここにも照明器具はあるはずだし、それが点いていないというのはおかしい。

いや、そもそも、校外側から警備員詰所のドアを開けられること自体が本来ならばおかしいはずだ。

それでも、恐る恐る警備員詰所の中に入る。

「すみません、入りますよ」

しかし、返事はない。

やはり何かあったのだろうか。

暗闇の中、壁を探り明かりを点けることには成功した。

だが、そこには床に臥した4人の警備員の姿があるだけだった。

カーテンもすべて閉められていて、それがあの暗闇を作っていたのだ。

「これは……まさか……」

そのうちの1人に近づいて確認してみると僅かではあるが、服が上下しているので呼吸が止まっているわけではないらしい。

「大丈夫ですか！ 起きて下さい」

倒れている警備員の襟元を強く握って揺らしてはみたものの、まったく反応がない。

「どういことだよこれ……何があったってんだよ」

他の警備員にも同じようにしてみたが、やはり反応がない。

どうするべきか思案していると、突然校内側に繋がるドアが開く音がした。ゆっくりと、開けられていく。

人が来たのか、と思ったが感じられる気配が人のものではない。もっと重苦しい、混沌とした気配だったのだ。

本能的にそれが妖魔のものであると察せられる。

漆黒の氾濫以来、晴也が妖魔を見たのは実に3年ぶりのことだ。つまり、あの事件以降は一度も妖魔と遭遇することはなかったのだ。

それがこんな形で遭遇してしまうとは。

気のせいかもしれないが、胸にある傷が僅かに痛む。

そして、ドアが完全に開いたそのときに妖魔は姿を現した。

その姿は、一見すると案山子のようなだった。だが違うのは、手足が、顔面が自由に動くこと。

頭には竹で作られたと思われる笠を被り、上半身を蓑で覆っており、蓑の中から覗く着物は深い藍色に染まっている。下半身はというと、胴体からまっすぐに伸びる雪駄を履いた大きな足が1つあるのみだ。

「どうしてこんな時間に妖魔がいるんだよ!？」

晴也は叫んだ。ただ、心に任せるままに。

しかし、妖魔はそれをまったく意に介していない。

それは、大きな1つ目の下のニヤリと笑っている口が物語っていた……

第1章 麗しき射手(5)

目の前にいるのは紛れもない妖魔だ。このままここに立ち尽くしていたのでは3年前の二の舞しかならない。

もう二度とあんな経験はしたくない。

そう思った阿倍野晴也は決死の覚悟で警備員詰所から逃げ出すことを考えた。

3年前の経験からして、ただの兵器では妖魔に太刀打ちすることはできない。

仮に少しの傷をつけられたとしても、それまでに自分が体力を消耗していて結局は負けるのがオチだ。

ましてや学校という環境に兵器など存在するハズもない。

幸いなことに、校外側へと繋がるドアは閉めていない。

隙さえあれば逃げ出すことは不可能ではない。隙さえあれば。

まずはその隙を見つける為に相手の動きを見極めなければならぬ。

一見、案山子のような風貌のその妖魔は晴也の姿を見つけるとそちらへ身体を向けた。

「こっちに来るつもりか！」

その動きから案山子様の妖魔が自分に襲いかかってくると予想した晴也はそう言った。

いつ襲い掛かれてもいいように逃走の準備は万端だ。

と、そのとき晴也の視界から忽然と妖魔の姿が消えた。

ふと天井を見上げるとそこには、身体を独楽の様に回転させて滞

空している妖魔の姿があった。

決して高くはない天井だ。妖魔もそれほど高い位置にはいない。だが、それはまた晴也との距離が近いということを示していた。

妖魔がその気になれば恐らく、一瞬の内に晴也を葬り去る事も可能だろう。そう、跳び上がったときの俊敏さがあれば。

しかし妖魔はそうしようとしなかった。

空中に滞空したまま、晴也の様子を伺っていたのだ。

「攻撃をしてこない？　　いったいどういうことだ」

攻撃してくると踏んでいた晴也にとって妖魔の行動は明らかに想定外だった。

だがこれはまたとないチャンス。逃げるなら今しかない。

覚悟を決め、晴也は床を強く蹴ってドアの方向へ駆け出す。

実際、逃げ出すことはそれほど難しいことではない。問題は逃げ出したそのあとだ。

十中八九、妖魔は晴也のことを追ってくるだろうし、運動部に入っているわけでもない晴也が逃げ切れる確証がないのだ。

つまり、これは賭けだ。賭けているものが命とは些か大きすぎる気もするが。

外に飛び出しはしたものの、案の定妖魔は晴也のことを追ってきた。

ドアの方から空気が動く音と、扇風機のような回転する音が聞こえてきた。

空が晴也が学校に来たときよりも暗くなっている。

どれほどの時間が経ったのだろうか。しかし、それを確認している暇もない。

妖魔がすぐそこへ迫っている。

今はただ逃げることを考えるべきだ。

その瞬間、頭の中から関係のないことは全て抹消された。
今、頭の中を支配しているのは妖魔のことだけ。如何にして逃げるか、それだけなのだ。

妖魔の接近を示す回転音が確実に近づいてきている。

ここで判断を誤れば命を落とすことになる。それだけはなんとしても避けなくてはならない。

そのためにも、やはり逃げるという選択肢が的確であると判断した晴也は一目散に道路に向かって逃げ出した。

しかし、現実というものはそう甘くはないらしい。

晴也の視界に突如何かが入ってきた。

それは案山子様の、妖魔だった。

先ほどと同じように、一瞬の内に移動して見せたのである。

これではどう足掻いても逃げることも不可能ではないか。

「おいおい……いったいどうしろって言うんだ？」

怯えしか感じ取れない声で晴也はそう呟いた。

そのとき、視界に新たなる物が加わった。左方から飛来する一筋の光だ。

その光は次の瞬間には妖魔の右腕の関節部分に深々と突き刺さっていた。

それと同時に妖魔は奇妙な呻き声をあげて、地面に倒れ伏した。どうやら左右のバランスが崩壊したために、自立するのが困難になったのだろう。

光の突き刺さった部分からは墨の混じったような浅黒い血液が小川のように流れ出す。

目を凝らして光を見てみると、それは銀色に輝く矢であった。

矢がひとりでに飛んでくるなど有り得ないのだから、どこかに射

った者がいるハズだ。

ということに思考を傾けていると、突然女の声が聞こえてきた。

「何やってるのよ、もしかして諦めようとも思った？」

いつかどこかで聞いた覚えのある声。そう、これは……今日聞いた覚えのある声だ。

「君は……確か、昼間の……」

声の主は昼間、晴也が廊下で衝突した女子その人だった。

「そう、神村梓よ。でも今はそんなことは関係ない。まずはこの妖魔、一本踏鞴ふもづつをなんとかしないと」

足音と共に、声も近づいてくる。

そちらを振り向くと、昼間と同じ制服に身を包んだ神村梓の姿があった。

ただ違うのは、弓を持っているのと矢筒を背負っていることだ。足音が止まったそのときに晴也は梓に問う。

「一本踏鞴……この妖魔の名前か？」

「そうよ。本当なら雪山とかで見かけることが多いのだけれど、何故かこんな学校みたいな所に現れているというわけ。まるで誰かが連れてきたみたいじゃない？」

晴也には何かなんなのか、今の状況がまるで理解できなかった。逃げられないと覚悟したそのときに矢が飛んできて妖魔が地面に倒れこんだ。それが実は昼間に衝突した女子が放った矢で、この妖魔は本来雪山にいるものだ。

晴也は大雑把にここまでの状況を頭の中で整理した。

「えっと……この矢は君が？」

梓の目と自分の目が合わないように、伏し目がちに晴也はそう言っ
った。

「むしろ私以外の誰の可能性があるっていうの？」

呆れたようなそんな口調で返答する神村梓。

「あはは……そうだよね」

どう返事をすれば良いか、晴也にはそれがわからなかった。
だからこんな返事になってしまった。

「で、あなたに聞くけど。あなたは妖魔と戦う気はあるの？」

今まで逃げることだけを考えていた晴也にとって、今の梓の言葉
は衝撃的な物だった。

戦うだなんて……そう思っている晴也には質問に対する答えが簡
単に出せない。

しかし、晴也の返答を待つことなく梓が口を開いた。

「残念だけど、どうするか選ぶ時間はないみたいね」

そう言って梓は妖魔の方を指差した。

「妖魔はやる気みたいよ？」

指差された方を見ると、今まで地面に倒れていた妖魔が起き上がるようにしていた。

左手を軸にして、足で地面を蹴って身体を回転させ、その反動で立ち上がる。

立ち上がった妖魔は、右腕に突き刺さった矢を思い切り引き抜き、晴也たちの方へと投げ捨てた。

そうすると同時に、噴水のように血が噴き出し、矢の抜けた跡から生身がむき出しになっている。

どうやら、外から見えていたのは皮膚ではなく装甲のようなものだったらしい。

噴き出した血で妖魔の足元に血池が生まれる。

このまま逃げることを考えていれば、いずれは自分の血であるような血池を作りかねない。

そんなのは、ごめんだ。

「どうするかって……こんなの、どう見ても戦うしかないじゃないかっ！ 逃げようとしたって、あんな素早さがあつたらすぐに追いつかれるし……それに、君だって戦っているんだ。だから、だから僕も……！」

今まで合わせていなかった目を梓の目に合わせる。

目と目が合ったときに、左胸の傷に僅かな違和感が感じられた。

梓の目に、決意のこもった力強い視線が注がれた。

「僕も戦う！」

最後にそう言い放つと、妖魔の投げ捨てた矢を即座に拾い上げた。

「そんなの拾って何するつもりなの？」

矢を構えながら梓が聞いた。

「兵器は妖魔にダメージを与えられない。でも、この矢は妖魔の腕に刺さった。そればかりか、血も流させたんだ。つまり、この矢は妖魔に攻撃することができる。そうなんだろう？」

晴也は早口に自分の考えを述べた。その声には先ほどまでのような怯えが一切感じられない。

代わりにそれよりも大きな決意が感じられていた。

「そう、だけど……あなた自分の腕に覚えがあるの？」

梓が心配するような口調で問いかけた。

しかし、晴也は今まででいちばんの大声で否定の言葉を出した。

「ない！ でも今の僕ができるのはこれが精一杯なんだ」

「そう……だったらあなたは限界まで妖魔の気を惹きつけておいてその隙に私が妖魔を攻撃するから」

少し心配は残るが晴也の決意を無駄にしてはいけなそうと思い、梓は晴也に指示を出す。

「わかった」

そう呟くと、晴也は妖魔に向かって走り出す。

あの妖魔、一本踏鞴には尋常ではない俊敏さがあるのは晴也が自らの目で確認している。

それ故に攻撃を当てるのは容易ではないことも重々承知している。だが、方法があるとしたら一つ。妖魔がこちらを攻撃しようと迫

ってきたそのときに矢を突き刺せばいい。

もちろん、時代劇のラストシーンのようにそう上手くできるわけではないし、できるとも思っていない。

しかしその妖魔とておそらく先ほど受けた傷が原因で、当初ほどの動きは妖魔にはできないはずだ。

なら、晴也にだって勝ち目はある。たとえ一縷の望みであったとしてもそれに賭けるしか選択肢は……ない。

「こい、妖魔！　僕が相手をしてやる。僕は……もう、逃げない！」

晴也の口から放たれた妖魔への宣戦布告。表層的にはそう捉えられるだろう。

だが、これは晴也の自分自身に対しての言葉でもあった。

今までで逃げることを選り続けてきた自分への。

晴也の言葉を理解したのかしなかったのか、どちらにせよ妖魔が動きだした。

先ほどまでと同じように妖魔は上空へと飛び上がった。

やはりというかなんというか、どうやらこの妖魔は上空からの攻撃を得意とするらしい。

なので一層攻撃を当てることは困難である。

しかし、晴也には考えがあった。

それはこの妖魔の特性とも言える俊敏さについてだ。

確かにこの妖魔の動きは俊敏ではあるが、瞬間移動といった類の業ではないはずだ。

もし瞬間移動が俊敏さの要因であったならば、一度上空へ飛び上がるといふステップは不要なはずだ。

なのに毎回のように上空へ飛び上がることが、瞬間移動が妖魔の特性ではないことを示している。

つまり、妖魔は高速で移動しているにすぎないのだ。
ならば当然、空気抵抗を受けていることになる。

この空気抵抗というものは通常、速度の二乗に比例するとされている。

これほど高速で移動をする妖魔はそれ相応の空気抵抗を受けていると考えられるのだ。

そしてそれこそが晴也の狙いであった。

仮にこの考えが妖魔にも反映されるとしたら、妖魔の身体を覆う装甲のようなものに空気抵抗によって発生した摩擦熱のダメージが蓄積しているはずだ。

それに梓の話から推測するに、この装甲のようなものはおそらく雪山の寒さに対してのものだろう。

もしそうだとしたら、熱への耐性は考慮されていないのかもしれない。

この仮定が正しければ、梓の放った矢が突き刺さったことにも説明がつく。

矢にも何か施されていただろうがそれは考慮せずに考えると、おそらく装甲のようなものは摩擦熱によってほんの一瞬だけ軟化していたのではないだろうか。

そこへ矢が飛んできた、だから突き刺さることができたのではないだろうか。

それが正しいのなら、これを利用してダメージを与えることができるかもしれない。

晴也自信が囷になり装甲の軟化と着地時の隙を誘発させ、晴也本人もしくは梓の攻撃を当てる。

更にもう1つ、可能性として考えられることがある。

梓の矢によって妖魔の右腕の一部分の生身が露出した状態になっている。

妖魔が高速で移動した場合、摩擦熱によってこの部分が火傷のよ

うな状態になり、内部から破壊することができかもしれない。

無論、これは全て晴也の推測なので確証という確証は存在し得ない。

だが、晴也はこの作戦が成功すると確信していた。

妖魔は晴也に迫ってはいるものの、一度も攻撃を当てようとはしていないのだ。

もし妖魔に晴也を攻撃する気がないというのなら、それはこの上ないチャンスである。

妖魔が上空から晴也のすぐそばをめがけて急降下してきた。

直接狙ってこないということは、やはり攻撃を当てる気はないのだろうか。

晴也は自分の考えが間違っていないかを確かめるために、この攻撃はサイドへのステップで避けた。梓にも矢を放たないように指示をする。

地面に降り立った妖魔を見ると、遠目では確認できなかった装甲から放たれるわずかな水蒸気が見てとれた。

それに、生身の露出した部分は火傷のように酷くただれている。

これを確認したその瞬間より、推測が確証となった。

「やっぱりね……神村さん、次は矢を！」

「ん……わかった」

第1章 麗しき射手（6）

しかし、晴也にはまだ不審な点があった。

なぜ妖魔が攻撃をしてこないのか、ということと自らの特性を把握しているのならば、このような行動をとらないのではないかということだ。

自らの弱点を把握しているのならわざわざ敵である晴也にそれを晒す必要はないはずなのに、妖魔は弱点を晒しかねない行動をとった。

そのことについて考えられる理由は2つ。ただ単にこの妖魔の知能が低いのか、それとも梓の言うように誰かの手で操られているのか。

晴也としてはできれば前者であって欲しいのだが、後者である可能性も捨てきれない。

妖魔の攻撃方法は主に体当たりのものだ。それにしても警備員詰所内で倒れていた3人の警備員には目立った外傷はなかった。

あれは倒れていたというより眠っていたという表現の方が正しいかもしれない、そう思うほどに。

もし眠っていたとしたら、それはおそらく人為的なものだろう。だから眠らされていた、というのが真実となる。

それをするための術——おそらくは催眠術のようなもの——を用できる何者かがこの辺りにいるということも考慮しなければならなくなる。そしておそらく、その何者かは魔能者であることも。

妖魔を操っている人物Ⅱ警備員を眠らせた人物であるのならまだ勝てる可能性はあるが、もし複数の人物による組織的な行動だった場合は手に負えないだろう。

だが、今はこんなことを考えている場合ではない。

まずは目の前にいる妖魔を倒すことから考えなくては。

このまま先ほどと同じ戦法を取り続ければ最終的には勝つことができるかもしれない。

しかし、それまで晴也の体力が保つかどうか。

もし妖魔を操っている者がいるなら、妖魔を倒したあとに姿を現す可能性がある。

限界まですり減った体力で対峙できる保証がない。

となると、短期決戦しか方法は残されていない。

これまでの一連の流れから、妖魔の行動後に関節部分を狙えばダメージを与えられることは確認できている。

「神村さん、狙うなら関節部分だ。そこなら効果的にダメージを与えられる！」

それを伝える為に、梓に声をかけたのだが、

「前言撤回。関節って……そんなピンポイントで狙えるわけじゃないじゃない！」

間髪入れずに梓から非難の声が上がった。

私には、無理だ、と機嫌を悪くしてしまった。

「でも、さっきは当ててたよね？　僕がこんなこと言っても説得力のかけらもないと思うけど……もっと自分の腕に自信を持ったほうがいいよ」

半分は頭の中で考えて捻り出された言葉、もう半分は自然とこぼれた言葉。

晴也なりのフォローのつもりだったのだが、

「そんな……そんなに簡単に言わないでよ!!　あなたにわたしの何がわかるって言うの!!」

それを聞いて梓は更に機嫌を悪くするだけだった。

これじゃ、まるで無意味ではないか。

だからと言って、晴也としてもこのまま大人しく引き下がるわけにもいかない。

「そうだよ、確かに僕には君のことは何もわからないよ」

それから一呼吸おいて、晴也は叫んだ。

「でも!　君だって頑張ってきたんじゃないのか?　君がなんの為に妖魔と戦っているかは知らないけど……でも、目の前にいるのは妖魔なんだぞ!」

梓の目を直視して訴えかける。

それと同時に胸の傷への痛みが増したような気がする。

「何なのよ……」

晴也の言葉が梓の心に重くのしかかった。

そんなの……言われなくてもわかってるよ。

なのに、どうして……どうして?

わたしは、あの時からずっと妖魔と戦ってきたんだよ?　今までずっと。

そうするしかなかったから。

そうすることしか、自分という存在を認められなかったから。わたしの役目は妖魔を倒すこと。

そう、3年前に誓ったから。お父さんとお母さんのお墓の前で。

復讐……それがわたしの生きる意味。今はそうなっていた。
この男はそんなことを何も知らないで……知ったような口を利かないですよ！

「何なのよ、あなた！！ わたしが戦えばそれで満足なの？ さっきまで逃げようとしてたくせに……偉そうに言わないですよ！！」

凶星だった。確かに先ほどまで逃げることしか考えてなかった。だから……反論の言葉が何も見つからなかった。反論など無意味。そう悟った晴也は素直に謝罪の言葉を述べた。

「ごめん……言い過ぎた」

そう言って、晴也は矢を持つ力を強くした。
不甲斐ない自分自身への怒りを込めて。

「そうだよ、君に頼ってちゃだめだ。僕が、自分でやる。いや、やってみせる！！」

梓に軽く笑いかけると、晴也は妖魔に向かって歩き出した。
またも、晴也と梓の目が合った。

そして、胸の痛みも更に増していく。とはいってもそれは刃物で刺されたような痛みではなく、針が刺さった程度の痛みが断続的に続くようなものだ。

そんなわずかな痛みであっても、それが積もり積もればかなりの痛みになるだろう。

だが、2人はその痛みに顔をしかめることはなかった。

2人とも、自分のことよりも目の前の妖魔を優先するべきとの認識であったからだ。

妖魔に対するスタンスはそれぞれ異なってはいたが、目的は同じ

だった。

ただ、初対面が最悪なカタチだったせいでお互いがお互いにどう接したらいいのかよくわからなかった。

だから険悪な雰囲気になってしまっただけなのだ。

もし、ここで初対面だったとしたら、もう少しマシな雰囲気だっただろう。

だが、現実の世界にif. なんてものは存在しない。

こうなってしまった以上、現実を受け入れなければならない。

そしてこの後、2人は……『魔能』という現実を受け入れることとなる。

戦いの運命を、命がけの戦いへと身を投じる運命を……

晴也は助走をつけて妖魔へと飛びかかった。

妖魔の懐へと忍び込み左肩の関節の部分へと銀の矢尻を深々と突き刺した。

返り血が、晴也の服を紅く染め上げる。

飛び散った鮮血が、赤い斑点の模様を晴也の全身の至る所を彩った。

矢による攻撃を受けた妖魔は呻き声を上げる。

耳をつんざく、言葉では言い表せないような声だ。

「ちっ……まだ倒せないのか！」

舌打ち混じりに晴也が呟いた。

妖魔にダメージを与えられる矢は今、妖魔の左肩へと刺さっていて晴也の手元にはない。

文字通り妖魔に一矢は報いたものの、攻撃手段を失ってしまった。俯いてどうするかを思案をしていたところ、目の前にいる妖魔が更に大きな呻き声を上げ出した。

何事かと思い、前方に目を向けると、右肩の関節に矢を受けた妖魔の姿があった。

後ろを振り向くと、弓を構えている梓の姿が見えた。

「何よ……別にあなたの為にやったわけじゃないんだから。ただ、わたしがそうしたかっただけよ」

離れていて、梓が俯いているので良くわからないが、心なしか顔が赤くなっている気がする。

気がするだけなので、本当に赤くなっているかと言われると確信はないが、少なくとも晴也にはそう見えていた。

「わかってるよ。まだ妖魔は倒れてない。力を貸してくれるよね？」

晴也がそう言うのと、梓は顔を上げて晴也の目を見つめた。

やはり……そうすることで胸の傷の痛みが増してくる。

「わたしは妖魔を倒す為に戦ってるんだから、当然じゃない」

梓が先ほどまでよりも明るい口調でそう言った。

「じゃあ……」

晴也がそう言おうとしたときに、異変は起きた。

晴也と梓、2人の左胸の辺りから緑色の光が溢れ出したのだ。

若葉の様に鮮やかな光がそれぞれの身体を覆い尽くしてゆく。

見る見るうちに2人の身体は光を纏い、鮮やかな輝きを放つようになっていった。

このときの2人はまだ、エクトプラズム発光という現象の名前を知らなかったが、これはその現象に類似していた。

だが、異なる点が存在していた。

エクトプラズム発光という現象は魔能者に起きる現象であり、その原因としては魔能の力を酷使や感情の昂りなどがあげられる。しかし、2人は魔能者ではない。

なのになぜ2人にそのような現象が起きたのか。

「何だ、この光は？」

「なによ……この光」

2人はただただ呆然となっていた。

今の状況がよくわからない、そのせいだろう。

突然、2人の身体を覆っていた光がそれぞれの身体を離れ、宙を舞った。

不規則に動くその軌道。

光は旋回や回転を繰り返して、遂には1つとなった。

1つになった光は一度球形に形を変えると、またすぐに2つに分裂した。

そのうちの1つは、晴也の左腕に纏わり付き、もう1つは梓の右腕と右手に持った弓に纏わり付いた。

弓に纏わり付いた光は、弓の形状を変貌させていった。質素な作りであった弓が、瞬く間に絢爛な弓になった。

「これは……まさか、魔能の力？」

梓が誰に言うでもなく呟いた。

そして晴也も。

「何か大きな力を感じる……これが魔能の力、なのか？」

左手を開いたり閉じたりしながらそう呟いた。

「神村さん、今なら……今ならやれる気がする!!」

唐突に晴也が大きな声でそう叫んだ。

「わたしも……そんな気がする」

梓も晴也の言葉に同調した。

「行くぞ、妖魔!!」

晴也はその場から左足を一步前に踏み出して、左手を妖魔に向けた。

左手の手のひらに全ての意識を集中させる。

もし、魔能の力に覚醒したのだとしても、肝心な使い方がわからない。

だから、晴也は全て自分の勘で行動を起こした。

「今だ、行け!!」

左手に力の集まりを感じた晴也はそれを押し出すように手を前に突き出した。

それと同時に、手から力の集まりが離れて行くのが感じられた。しばらくして、妖魔は突然その場でのたうちまわった。

その様子を見て、晴也は梓に言う。

「もしかして……神村さん、今ならいけるかもしれない!!」

「わかった。仕方ないから……やってあげる!!」

そう言って梓は弓矢を構える。

今までと違って装飾の施された美しい弓を構えるその姿は、梓自身の風貌も相まって『麗しき射手』そのものだった。

深呼吸をして目標からずれないように呼吸を整える。

梓自身の照準が標的を捉えたそのときに、弓を最大限に引き絞った。

弦がいちばん強く張ったその瞬間に矢から手を離す。

束縛から解かれた矢は風を、空気を切り裂きながら飛び出す。

周りの空気の流れを押しつけるように矢は空中を突き進む。

そして妖魔に達しようかというときに、3つの矢に分裂をした。

1つは元からの矢、残り2つは光の矢に。

それらは一斉に妖魔の身体を貫く。

頭部、胸部、腹部の三カ所を装甲ごと同時に撃ち抜かれる。それも矢によって。

妖魔の体内を蹂躪し尽くした矢は役目を終えて地面に落ちる。

そこには光の矢はなく、元々の銀の矢のみが残されていた。

妖魔はその場に倒れ伏した。

動く様子は一切見られない。

おそらく、先ほどの梓の攻撃で死に至ったのだろう。

「ふう……」

妖魔が動かなくなったのを確認すると、晴也は一息ついた。

しかし……あの力は何だったのだろう。

左手に集まった力の塊をぶつけたら、妖魔が苦しみ出した。

そのとき一瞬、装甲の裂け目から覗いた皮膚がその前までよりも酷くただれていたことから、おそらく火に関する何かだったのだろうと晴也は推測する。

そしてあの苦しみよう、どう見ても内部から身体を焼かれているようにしか見えなかった。

だからこそ、梓の攻撃が通用すると確信が持てたのだ。

これで全て終わった。そう思っていたのだが、梓の口から衝撃的な事実が告げられる。

「まだ、終わりじゃないよ。妖魔は……校舎の中にもいるんだから」

第1章 麗しき射手（7）

「どうしてそんなことがわかるんだ？」

晴也は胸に抱いた疑問をそのまま口に出した。と同時にあのタイミングで梓が現れたことに納得することができた。

「よくわからないのだけど、気がついたら妖魔の気配を感じることができるようになっていたのよ」

弓を背中に負うと、妖魔に突き刺さった矢と地面に落ちた矢を拾い上げながら梓は答えた。

妖魔の肩に刺さった矢を抜くと、矢先に付着した血液をスカート
の右ポケットから取り出したティッシュで丁寧に拭き取る。

妖魔を貫通した方の矢は全体的に血液が付着しているので、一本目よりも拭き取るのに時間がかかってしまう。

梓の作業が終わる頃を見計らって晴也は声をかけた。

「やっぱり……校舎の中の妖魔も倒しにいくのか？」

「当然、倒しに行くに決まってるわ。でも……ここに来るまでに感じた気配よりも、妖魔の数が減っているのが気になるわ」

そう言いながら、梓は校舎を見上げた。

妖魔と戦っているうちに辺りは暗くなっていたようだ。

なのに、校舎内の照明が1つも点灯していない。

まさか全員妖魔にやられたのか？

晴也が1人、考え込んでいると梓が動きを見せた。

「と、その前に」

そう呟くと、梓は再び妖魔の方を向くと、スカートの左ポケットから千円札ほどの大きさをしたお札のようなものを取り出した。

梓がその札を右手に持ち空に向けて掲げると、それは月光によって妖しく照らされた。

月光を浴びた札は幻想的な光を湛えている。

梓はその月光を浴びて輝きを伴った札を妖魔に向けて掲げた。

「浄化符よ、あらみたま荒御魂に囚われしこの者の魂をその聖なる光で禊祓いたまえ」

梓の言葉に呼応するように、浄化符と呼ばれたその札は眩いばかりの光を更に放った。

放たれた光は空中で収束し、五つの光線に変貌すると妖魔を目掛けて夜の闇の中を駆け巡る。

蛇行を続けた光線はやがて妖魔に辿り着くとその身体に蛇のようにまとわりついた。

それらの光が妖魔の身体の表面をなぞるように滑る。

光になぞられた部分が青白く神秘的な光を漂わせる。

妖魔の全身が全てその光で覆われた頃を見計らい、梓は言葉を続けた。

「荒御魂よ、その魂に平穏を取り戻し、あるべき場所に帰りなさい！」

梓のその言葉を合図に、妖魔の肉体は夜の闇の中に光粒として霧散していった。

妖魔の亡骸が見えなくなると梓はふう、と胸を撫で下ろした。

晴也はというと、梓の一連の行動をただ呆然と見ているしかなか

った。

目の前の状況の整理に脳がフル活用されていて、それ以外の思考は一切行われなかった。

ハッと我に返った晴也は、梓に先ほどの行動の意味を問う。

「えっと……今のは何を？」

戸惑いからか、声が少し震えている。

心なしか声も裏返っているような気もする。

しかし、晴也のそんな様子を気にすることもなく梓は問いに答えた。

「妖魔の浄化よ。この浄化符に月の光を集めて妖魔の魂を浄化するの」

そう言って右手に持っていた浄化符を晴也に見せた。

何も書かれていない、純白の札だ。

ホントにこんなもので……いや、目の前でやってたじゃないか。

「どう、驚いた？ 何にも書かれてないのに妖魔の魂を浄化できるんだもんね」

まるで晴也の心を読んだかのようなことを梓が言った。

もしかして、考えていることを知らず知らずのうちに口に出してしまってるのではないかと晴也は一瞬焦ってしまう。

「あ、別にモノログを読み取ったとかじゃないからね。最初見たときはわたしも同じこと思ったから……」

そう言う梓の顔には自然に笑みが浮かんでいた。

「どうやら晴也の心配は杞憂だったらしい。

とはいえ、今の言葉も心を読み取られたのでは？　と疑ってもおかしくないものではあったが。

「なあ、そろそろ――」

晴也がそう言おうとしたそのとき。校舎の方からガラスのようなものが割れる音が響いてきた。

それも1度や2度ではない。複数の割れる音が連続してだ。

これは、ただごとではない。

校舎の中の妖魔がやったのだろうか。

「ねえ、今の音……聞いたよね？」

そう梓から聞かれた。あんなに大きな音、聞き逃す方がどうかしている。

「ああ、聞いた。もしかして妖魔がやったのか？」

「わからない。でも、確かめないと！」

梓の言葉に気圧されて、晴也は思わず首を縦に振ってしまっていた。

もともと確認するつもりだったので何ら問題はないのだが。

「でも……どうやって学校の中に入ればいいんだろ」

梓の言うことももっともだ。正門も通用門も閉められた状態では普通、校内に入るのは不可能だ。

しかし、晴也はその方法を知っていた。

警備員詰所から校内に入れることを。

何故なら、先ほど倒した妖魔がそこから現れたのを目撃しているからだ。

「いや、警備員詰所から校内に入ることができるんだ。現にさっき倒した妖魔もそこから現れたんだし」

警備員詰所を指差しながら晴也はそう言う。

それを聞いて梓は大きく頷くと、警備員詰所に向かって走り出した。

それについて行くように晴也も走り出す。

警備員詰所に足を踏み入れたところで、梓が突然立ち止まった。

床に倒れている警備員を凝視している。

梓もこの様子に疑問を抱いたのだろうか。

「おかしいね、これ。あの妖魔にやられたにしては目立った外傷がないね。魔能者……か」

警備員の1人に近づいて様子を見ながら梓がそう言った。

と、そのとき梓が警備員の服に付着した何かを手にとって晴也に見せた。

「ねえ、これって髪の毛、だよな」

少し茶色気の混じった、セミロングの髪の毛。毛先がふんわりとしたカールになっているのが特徴だ。

どうやら女の髪の毛のようだ。

この髪の毛は学校を襲っている謎の人物のものか、警備員の奥さ

んのものか。

後者の場合なら特に問題はないのだが、前者の場合だとこれは犯人を特定する大きな手がかりになるだろう。

なんならこの件が解決してからDNA鑑定をどこかの組織に頼めばいい。

それで犯人の素性を割り出すことができるはずだ。

しかし今は校舎内の妖魔を倒すことを優先しなくては。

梓は拾った髪の毛をティッシュに丁寧に包むと、それをポケットに入れて警備員詰所から校舎側に出た。

晴也もその後について校舎側に出る。

そこもやはり、人気のない状態だった。

いや、正確にいうと人はいる。いるにはいるのだが、その全てが警備員と同じようにその場に倒れ込んで意識を失っていたのだ。

その中には部活動中だったのだろうか、晴也のクラスメイトや梓のクラスメイトの姿もある。

「学校全体がこんな感じか……どんな超能力使ってるんだよ」

倒れているクラスメイトを視界の隅に入れながら晴也が呟いた。

そんなに話したことがあるわけじゃないけど……でも、クラスメイトをこんな目に遭わせるなんて、許せない。

晴也は怒りから無意識のうちに左手に握り拳を作っていた。

クソッ……なんだってよりによってこの学校が標的なんだよ……左手にさっきよりも強く力が込められる、手の甲に薄っすらと血管が浮き上がる。

晴也と同じように自分のクラスメイトのそばにいた梓が口を開いた。

「催眠術……」

ただその一言だけを呟いていた。

催眠術と言われると、五円玉を使ったものがまず頭に浮かんだ。まさか校内の全ての人間にそんなことをするわけにもいくまい。梓の言う催眠術とは想像したものとは全く別のものだろう。

そう晴也が思考を巡らせていると、梓が言葉を続けた。

「多分、この状況を作り出した魔能者は音波系催眠術を使ったのね。そうでなくちゃこの広範囲に影響を及ぼすことなんてできないわ」

そう言って梓は校舎の外壁に取り付けられたスピーカーを凝視した。

始業・終業の合図や校内への連絡を伝えるために設置されているスピーカーだ。

つまりその犯人は放送室を使って学校にいる全員に催眠術をかけたというわけか。

「催眠術か、厄介だな。それに妖魔もいるんだろ？」

「そうよ、まずは校舎の中に入ってみましょう」

梓に促されて晴也は校舎内に立ち入った。

やはりここでも多くの生徒や教師が意識を失って倒れている。

この様子だと、おそらく校内にいた人間は全て意識を失っていると考えても問題はないだろう。

だが、気になるのはこの上の階——つまり2階——から聞こえてくる物音だ。

衝突音やら、足音やら。その中に明らかに人間の足音も混じっている。

もしかやこの状況を作り出した張本人か？

校内の人間は催眠術で 全て意識を失っているはずだ。だとしたらその可能性は大いにある。

足音を立てないようにして階段を一段一段踏みしめる。

一段昇る毎に、妖魔の特有の気配が濃くなってきたように感じられる。

いつ襲い掛かれてもいいように、梓は弓と矢を構えながら階段を昇る。

最後の一段を昇り切った2人の前に、1人の男がいた。

後ろ姿だけだが、屈強なガツシリとした両腕と筋肉質の安定感のある両脚、少し逆立った短い黒髪、赤いシャツが見える。

その男は右手で廊下に竹刀を突き立てている。

晴也も梓も、この男に見覚えがあった。

いや、見覚えがあったなんてものじゃない。

何故ならこの男は——雷同高校の教師、鬼島亮治おにじまりょうじその人だったのだから。

どうして鬼島先生がこんなところに……

まさか、この人が……鬼島先生が、みんなをやったのか、妖魔をけしかけたのか!!

「先生、これはどういうことですか!! あなたは……あなたがみんなを!!」

気がつくとき晴也は感情に任せて叫んでいた。怒りが強く感じられる。

このままだと殴りかかってしまいそうだ。体格差から見てもまず勝てるはずもないのに。

しかし、すんでのところで梓が制止する。

「待って! 先生は何も悪くないよ!」

梓は構えていた弓を下ろして、晴也の前に両手を広げて立つ。
その直後、鬼島は振り返り2人に声をかけた。

「お前たちは……安倍野と神村か。校内にいた意識のある生徒は全て校外へ退避させたはずだが……」

そう言う鬼島の背後から、土色をした牛の上半身だけの身体に、
両前足に鉤爪を持った妖魔が接近していた。
それに気づいた晴也が鬼島に向かって叫んだ。

「先生、後ろからっ!!」

今度は怒りの感情は感じられない。

しかし、晴也が言い終わる前に鬼島は行動を起こしていた。
後ろに向き直し、右手で竹刀を構える。

そして刀身に刃先から手をかざした。

すると、手をかざされたところから順に刀身が青い光に包み込まれていく。

刀身全てがその光に包まれると、鬼島は突進してくる妖魔が最接近したそのときに竹刀で勢いよく薙いだ。

断末魔を上げる間もなく、妖魔は身体を一刀のうちに両断されて亡骸となった。

僅か数秒の出来事。目で追うのがやっとだった。

鬼島は妖魔の血飛沫を浴びたが気にせず再び晴也たちの方を向いた。

何が起こったのかわからない、そんな表情で晴也たちは鬼島の顔を見ている。

「霊力刀、それが私の魔能だ」

呆然とする2人に構わず鬼島は言葉を発した。
魔能、確かに鬼島はそう言った。

「まさか先生も魔能者……」

晴也が言葉を漏らした。

それを聞いて鬼島、

「私はある組織からこの学校に派遣された、対妖魔教師の1人だ。
何故お前たちがここにいいのかは後日追及するでしょう。今は、この状況を打開するのが先決だ」

にわかには信じられない言葉だ。こんなものはアニメかマンガの中の世界でしか聞いたことも見たこともない。

しかし、それが目の前に現実として存在している。

「先生、犯人はどこにいるんですか？」

晴也よりも先に現実を受け入れた梓は鬼島にそう尋ねた。

どうやら梓は飲み込みが早いらしい。

「他の教師からの連絡では屋上へ向かったのが確認されている。本来ならば我々が向かわねばならないのだが、妖魔の殲滅を優先しなければならぬ。すまないがお前たち2人に犯人の追尾を頼みたい」

「わかりました。さあ、行くわよ阿倍野晴也君？」

梓は鬼島の頼みを快く承諾すると、晴也の手を引いて屋上へ向けて走り出した。

「どういうつもりだよ、神村さん。あんな非現実的な言葉を信用しろってか？　組織？　対妖魔教師？　なんだよ、それ……」

3階の踊り場で晴也は足を止めて梓にそう言った。
覇気のない声。

しかし、梓はそれを咎めようとはしない。

「わたしだって信じられないよ。でも、それが現実なんだから受け止めるしかないんだよ。それに、鬼島先生はわたしたちを助けてくれたじゃない。だったら、信用できるんじゃないかしら？」

優しい口調で晴也に語りかける。

梓の、言う通りだ。

1日の間にあまりに多くのことが起こりすぎて何が正しくて正しくないのかの判断が追いつかなかった。

しかし、梓の言葉がそれを後押しする。

「そう……だね。わかった、僕も現実を受け入れるよ」

梓が晴也に手を差し伸べる。

白くて小さな華奢な手。でも、その手にはそれ以上の包容力が感じられる。

女神の手。今の晴也にはそのように見えていた。

晴也は何も言わずにその手を取った。

梓も何も言わずにただ、頷いた。

梓の手引きで2人は屋上へとたどり着いた。

鬼島の情報が正しければ目の前の鉄製のドアを1枚隔てた先に、

この事件の犯人がいるはずだ。

自然と顔の筋肉が強張る。

深呼吸をして2人は気持ちを落ち着かせた。

その後、2人はお互いに目を合わせて合図を送る。

お互いの目が準備はできている、と物語る。

梓が冷たく冷えたドアノブに手をかけた。

ゆっくりとドアノブが回されて、屋上へのドアが音を立てて開いてゆく。

ドアの隙間から風が吹き込んでくる。

風が梓の髪を撫でて、フワリと舞った。

ドアが完全に開くと、目の前には夜の闇が広がった。

眼下の町には電灯の明かりが光の道を作っている。

パツと見ではわからなかったが、屋上の端にこちらに背を向ける黒い人影が視認できた。夏なのに漆黒のコートを着ているせいで夜闇と同化している。

風が吹き、その人影のセミロングの髪とコートがなびく。

2人は恐る恐る、その人影に近づく。

人影との距離が縮まるにつれて、殺気のような妙な感覚が強まってくる。

人影との間隔が10メートルほどになったとき、相手方から動きがあった。

コートを纏った人影が、ゆっくりと後ろを振り向いたのだ。

しかし、本来顔があるはずの位置に、異様なものが見えた。

それは、お面のようなものだった。

一对の角が生え、恐ろしげな形相をしたその面は、般若面であった。

その狂気じみた形相に、一瞬怯んでしまう。

そんなこともお構いなしに、般若面の者は言葉を発した。

「待ちわびたよ2人とも。君たちは、3年前まで……ここから見える光景がもっと活気に溢れていたことは覚えているかな？」

その面は口も閉じられていたために、声が籠っている。

女の声であることはわかるのだが、どれほどの高さの声であるのかがわからない。

「何が言いたい」

晴也は、恐怖の感情を振り払うと、般若面の者に逆に問う。
質問を無視されたことも気にせず、その者は晴也の質問に答えた。

「君たちは、魔能者が排斥されるこの状況を良しとするのかい？
魔能者による反乱を恐れた日本政府は我々を低く扱うことで弾圧しようとしたのだよ。妖魔と対等に戦えるのが魔能者だけと知りながらね」

芝居がかった口調で般若面の者はそう言った。
カツカツと靴を鳴らして2人に近づいてくる。

「しかし、政府の考えは甘かった。その場しのぎの策でしかなかったのだ。そして弾圧に苦しむ魔能者たちは遂に武器を手についた。政府と戦うために」

やはり芝居がかった口調で言いながら、梓の目の前で立ち止まった。

梓の目を凝視して言葉を続ける。

「さて、本題に移ろう。阿倍野晴也と神村梓。率直に言う、我々に手を貸したまえ、魔能者の未来のために」

そう言って般若面の者は梓に手袋に覆われた右手を差し出した。

「どうして、どうしてわたしたちがあなたたちなんか手を手を貸さなければならぬの！」

そう言いながら梓はその手を突っぱねた。

それを見ていた晴也も般若面の者を睨みつける。

「君だって、傷があると言うだけでクラスメイトから忌み嫌われているのだろうか？」

そう、梓に言い放った。

心の籠っていない、強烈な言葉だ。

冷たい言葉が梓の胸に突き刺さる。

「そ、そんなこと……」

梓は気丈に振舞おうとしたが、すでに限界だった。

今にでも、泣き出したい。そんな気分だった。

「そんなことはない！ 魔能者だからってだけでみんながみんな差別をするわけじゃないんだ！！」

突発的に梓に代わって晴也が反論した。

そのときの晴也の脳裏には、風間の言葉が浮かんでいた。「ま、でも俺はそんなことで差別するのは良く無いと思うけどな。俺たち

だっていつ妖魔に襲われるかわからないんだし」という風間の言葉が。

「ほう……面白いことを言うな。ならば証明して見せろ!! その言葉が真であると言うのなら!!」

般若面の者が力強く反論する。

決定的証拠を見せてみる、と。

しかし、それを証明する術を晴也は持ち合わせていなかった。

「所詮人の言葉など信用には値しないのだ。その場を取り繕うための方便にすぎないのだからな」

高笑いをしながら、その者が言った。

愉快そうなその口調に腹が立つ。

「残念なことに私の魔能、音操おんそうは魔能者には効かなくてね。一般人相手なら容易く効くのだがね」

「やはりお前が!!」

今にも殴りかかりそうだった。

しかし、般若面の者が放った術がそれを食い止める。

「音というのは即ち、空気の振動だ。そしてその振動とは物体を通して縦波として伝わる力学的エネルギーの変動とされている。今の技、音壁おんへきはその力学的エネルギーを全て運動エネルギーに変換することで君の攻撃によるエネルギーを相殺させたのさ」

般若面の者が晴也に技の解説をしている間に、梓はその者に向かって矢を放った。

しかしそのことごとくが同じように空間上で受け止められた。

「さあ、これでもまだ我々に手を貸さないというのかね？」

第1章 麗しき射手（8）

音の持つエネルギーを異なるエネルギーに変換し、それを望み通りの形で使用する魔能。

それを巧に操る魔能者との戦いは妖魔との戦いとは比べ物にならないほど苛烈なものになるだろう。

肉弾戦は不可能と悟ると、晴也は般若面の者との間合いを取った。お互いの拳がお互いの射程距離外になった頃に、般若面の者が口を開いた。

「どうやら君たちは大人しく従ってくれそうにないみたいだ。こんなことはしたくなかったが……力で従わせるしかあるまい!!」

般若面の者はそう言うのと、体勢を低くして右手を勢いよく屋上の床に叩きつけた。

その刹那、コンクリートの地面を伝う衝撃と、空気を伝う振動とが晴也と梓の身体を襲う。

突然の揺れに自立することが困難になった2人はその場に座り込むようにして堪えようとする。

それでも強烈な2方向からの振動に2人の身体は大きく揺さぶられる。

それから僅かな時間のあと、ガラスのようなものが割れる音が連続した。

先ほど聞こえた同じような音はこの技が原因だったのか。恐らくは共振現象によって窓ガラスが割れたのだろう。

揺れが止まり、頭がクラクラしながらも立ち上がった晴也が言う。

「妖魔を放ったのもお前か？ どうしてそんなことを！」

「君たちを……正確には神村梓を誘い出し、魔能に覚醒させるため

さ。別にもう1人は君でなくてもよかった、解傷を持つモノなら誰でも、ね！」

言い終わるが早いのか、未だ焦点の合わない晴也に突然、正面からの衝撃が加わり身体が数メートルほど吹き飛ばされた。

足が地面から離れる瞬間に、地面に対して運動エネルギーに変換された音エネルギーを放ち、その反動を利用して初速度をできる限り高める。

そして片足が接地するその瞬間瞬間に、足元から進行方向に向けて先ほどのように音エネルギーから変換された運動エネルギーを放って加速度を増大させる。

この2つの行程の相乗効果によって爆発的なスピードを得ることで相手が知覚するよりも早く移動することが可能になる。

そのうえ移動時に発生する音も全て運動エネルギーに変換される為、音によって察知されることもない。

そして得られたスピードを利用しての近接攻撃。

この一連の流れこそが、晴也を襲った衝撃の正体だった。

肋骨の僅かに下の辺りに走る強烈な鈍痛と、コンクリートの地面に打ち付けられた衝撃が同時に晴也の身体を突き上げる。

当たりどころが悪ければ、肋骨の2、3本は今頃使い物にならなくなっていたかもしれない。

幸いにもそれは免れたが、肺にも相当の衝撃が到達していたらしく、呼吸する度に痛みが身体中を駆け巡る。

数回呼吸した後口の中にジワリと鉄のような味が滲み、それから数回呼吸した後に数倍の濃度の鉄の味が口の中を余すところなく満たしてゆく。

遅れてやってきた鉄の味をした液体が喉を伝って晴也の口腔へと流れ出した。

それが血であると気づいたのは、すでに口内の血が屋上の床に吐き出された後だった。

辺りに血の海が広がり、口元から口内に残っていた血が小川のようになり落ちる。

意識が、薄れていく――

このまま、こんな所で死んでしまうのか？

もうダメだ、そう思ったそのときに、梓の声によって意識が引き戻された。

「ダメよ、阿倍野君！！　こんな所で死んじゃダメ！！」

晴也の瞳にその映像が映し出されることはなかったが、涙を流し天を仰ぐようにして懇願する梓の姿があった。

晴也の心の中で、梓の言葉が何度もありピートされる。

そうだ、こんな所で死んでちゃ今まで生きてきた意味がないよな。こんなときまで苦しみから逃げてちゃダメだよな。

それに……委員長ともまた明日って言ったじゃないか。

約束、破っちゃ悪いよな。あんなに気にかけてくれてるってのに。風間のことも、応援するって言ったっけ。

みんなの為にも、こんな所で死んじゃ――ダメだ。

逃げてちゃダメなんだ。立ち向かわないと。

そうさ……もう、逃げ出さない！！

僅かに残った意識で前方を睨みつけるように凝視すると、先ほどまで晴也のいた位置に般若面の者が悠々と立っている。

梓はというと、般若面の者に向けて弓矢を構えている。

神村さんも戦おうとしてる。

僕だって戦いたい。力になりたい。

なのに――身体が言うことを聞いてくれない。

思い通りに、動いてくれない。
身体が自由に動かせないってこんなにも……もどかしいモノなのか。

必死で身体を起き上がらせようとするが、思ったよりもダメージが大きくて自由に動かせない。
動かそうとすると、身体中に激痛が走る。

どうして……動いてくれないんだよ。
動けよ、動いてくれよ!!
今動かないで、いつ動くっていうんだ……

身体が痛みと倦怠感によって縛り付けられて動かせない。
自らの不甲斐なさに意気消沈していると、頭の中に聞いたこともない男の声が鳴り響いた。

遂に幻聴まで聞こえるようになったのだろうか。
その声は、晴也に語りかけてくる。
そして意識が全てその声に注がれ、瞼が静かに閉じられた。

真っ白な空間。

そこに佇むのは晴也ただ1人。
他には何者の姿も見えない。
思索を巡らせていると、先ほどと同じ声が聞こえてきた。

『汝、生を望むか?』

謎の声からの晴也への問いかけ。
それに晴也は答えようとするが、声が出せない。
その代わりに、頭の中に自分の思考が声となって再生される。

——生を望むか、だって？ 当然だ。望むに決まっている！！

『汝、力を望むか？』

新たな問いが晴也に投げかけられる。

どうやら、頭の中に想像するだけで謎の声との会話ができるようだ。

——誰かを、救えるのなら……そのためなら、力を望む。

そう考える晴也頭の中には、梓の姿が映し出されていた。

『ならば、我と契約を結ぶか？』

——契約？ その前に聞かせてくれ、お前が何者なのか。

『我は他化自在天の王、伊舎那天なり』
たげじざいてん いしゃなてん

——そうか。で、契約というのは？

『我が汝に力を貸す代わりに、汝が我が願いを叶えることだ』

——願いを叶える？

『そうだ。我が願い、それは——力を悪用する者の粛清だ』

力を望め悪用する者、その言葉で目の前にいた般若面の者の姿が思い出される。

——わかった。契約しよう、伊舎那天！！

『良からう。しかし、汝は既にこの場を打開でき得る力を手にしている。まずはその力、使いこなして見せよ』

——でも、身体が……

『案ずるな。汝が生を望んだそのときより、既に傷は癒えておる。さあ、生を望め！！ 力を望め！！ そして、その双眸を開くのだ！！』

その声がトリガーとなり、意識は現実に戻される。

長い時間が経ったように思われたが、梓にも般若面の者にも動きは見られない。

あれは……一体、何だったんだ。

と、気がつくとも身体を襲っていた痛みや倦怠感が感じられなくなっていた。

どうやら伊舎那天の言っていたことは間違いではないらしい。

だが……この状況を打開でき得る力って何なのだろうか。

晴也の思考を阻害するように般若面の者が言葉を発する。

「どうした、まさか驚いているのか？ 私が一本踏鞴のように高速に移動したにもかかわらず、傷一つ負っていないことに」

自ら問いかけておきながら、晴也の答えを待たずに言葉を続ける。実際、晴也もそこまで思考が及んでいなかったものでどちらにせよ答えるのは不可能だったのだが。

「それは当然だよ。移動に伴う熱エネルギーは移動時に発生する音エネルギーから変換された運動エネルギーによって全て相殺されているのだから」

勝ち誇ったように般若面の者は言う。

それが、晴也の思考の手助けをするとも知らずに。

そんなことも知らずに般若面の者はトドメを刺さんと、晴也に向かって歩み寄る。

コツ、コツ、コツと一步一步確実に足音が迫ってくる。

死を伴う足音、死神の足音が。

晴也の身体を掴むことができる位置へたどり着くと、そこで足音は鳴り止んだ。

「神村梓の覚醒、それが達成された今、君をどうしようと構わない。上からの指示は神村梓を覚醒させることだけだったからな」

そう言いながら、腰を低くして晴也の顔を見つめる般若面の者。晴也の生死を自らが司っている、自分は晴也にとっての神だ。まるでそう言いたげな目で晴也のことを凝視する。

「元から君たちが仲間になってくれるとは思っていないさ。今回はただ、その圧倒的な力の差を見せつけようとしただけだ」

晴也の首を掴もうと、手袋に覆われた右腕をおもむろに近づける。

「安倍野君！ 逃げて、安倍野君！」

それを見た梓がなんとか晴也を逃げさせようと大声で叫んだ。声が枯れてしまいそうになる程の大音量。

それでも、晴也の身体が動くことはなかった。

「愚かにも私に対抗しようとしたその勇氣は認めるが……しかし！

君の切れるその頭は少々厄介なんだよ。だから……すまないがここで、死んでもらう！」

そう言って晴也の制服の襟を掴もうと腕を伸ばす。

その瞬間、般若面の者は突然手首を掴まれてそれを阻止された。

それは般若面の者にとっては予想外の出来事だった。

晴也の首を掴もうと手を延ばしたら、まさか自分の腕が掴まれるとは思ってもいない事態だ。

どうしてあれほどのダメージを受けていながら動ける！！

あまりの事態に般若面の者は齒ぎしりをしていた。

「どういうことだ！ 何故、どうして！」

狼狽する般若面の者。

今までと声も、般若面から覗く目の色も明らかに違っている。

晴也への恐怖すら感じられる声だ。

恐れおののくように、般若面の者は晴也から離れようとする。

しかし、晴也の手によって掴まれているせいで離れることができない。

「なあ、お前……要らないことまで喋りすぎじゃないかな？」

そう言って般若面の者の腕を支えに起き上がると、晴也の方から突き放すようにして腕の拘束を解く。

「ごめん心配かけたね、神村さん。でも、僕は大丈夫だから安心して」

梓の方を向いて晴也はそう言った。

「良かった、生きて良かった。わたしの目の前で人が死ぬのは……もうイヤだったから……」

涙の雫が一粒、梓の頬を伝いながら瞳から零れ落ちる。

梓はそれを指で拭うと、誰にも聞こえないように呟いた。「バカ……」と。

「……ッ！」

般若面の者は晴也に反論することができなかった。

晴也の言うことは事実なのだから反論したところで意味はないが。

「おかげで、攻略法がわかったよ！」

そう言いながら左手に握りこぶしを作り、そこに渾身の力を込める。

それを見た般若面の者が声を震わせながら言う。

「ハハハッ……殴りかかってきたところで……また、同じ目に遭うだけ……だぞ……」

「誰が殴るなんて言った!! 僕が見つけた攻略法はこれだ!!」

左手を空気を殴るようにフックの要領で振るうと、限界に到達すると拳を解き放つ。

拳に込められていた力がそのままの軌道で般若面の者へと向かって行く。

一本踏鞴と呼ばれた妖魔を倒すときに使ったのと同じ技だ。

やはり同じように、しばらくすると般若面の者は左腕を抑えて苦しむ素振りを見せた。

「お前自分で言ったよな？ エネルギーを変換してるって。つまりそれは、物理的なエネルギーを伴った攻撃はお前には通用しないってことだ。逆に言えば、物理的なエネルギーでなければ攻撃は通用するってことだよ！！」

般若面の者が纏っていたコートの左腕の部分に焼け焦げたような穴が空いているのがわかる。

相手もさすがのもので僅かな時間の内に晴也によってもたらされた状況を理解したようで、今は平然とその場に立っている。

「チッ……やられたよ。まさか私の力を逆手に取られるとはな。しかし、同じ攻撃は二度も通用せんぞ？」

般若面の者は再び屋上の床に右手を叩きつけると、振動と衝撃を放った。

「こっちだって同じ攻撃は効かない！！」

晴也も同じように左手を地面に叩きつける。

すると、ちょうど晴也と般若面の者の中間地点でコンクリートの地面が隆起してそこで衝撃が食い止められた。

振動は食い止められなかったものの、大したダメージにはならない。

「その力、陰陽術か！！」

晴也の使用した技を見て般若面の者が叫ぶ。

「そんなこと………知るかよ！！」

晴也も、叫ぶ。

「自らの力も把握せずに戦いに臨むとは……笑止!!」

般若面の者からまたも技が放たれる。

今度の技は空気を伝っての振動による攻撃のようだ。

「そんなの、戦ってる内に理解すればいいだろ!!」

振動が晴也に伝わり切る前に、2人の中間地点で金属音が鳴り響き技が食い止められる。

晴也の力によって般若面の者の技が妨害されたのだ。

「あり得ない、あり得ないぞ！ 音速に匹敵する速さで私の攻撃を理解するなど!!」

「理解するも何も、お前が地面に手をついたら衝撃、何もしなかったら振動がこっちに来てるだけじゃないか。モーション見てからでも充分間に合う！ それにお前は神村さんには手出しできない。だから僕にしか攻撃が来ないのもわかりきってる！」

それからも2人の間で技の応酬は繰り返し広げられた。

般若面の者が技を放ち、晴也がそれを技で阻害する。

2人の身体が少しずつ緑の光で覆われ始めた。

エクトプラズム発光と呼ばれる現象の現れだ。

般若面の者は、この状態が危険だと重々承知しながらも技を放つのを止めない。

放って、止められの繰り返しは何度も行われたが、それにも終止符が打たれる。

「ちょっと……2人して熱くなりすぎだよね。おかげで……気づか
れずに攻撃できるけど」

梓は弓を構えると、般若面の者に狙いを定めた。

矢が刺さっても死なない程度の場所を慎重に狙う。

いくら攻撃されたとはいえ、人を射るのにはやはり抵抗がある。
緊張と恐怖から矢を握る手が震えているのがわかる。

そして狙いが定まると、晴也に声をかける。

「危ない、阿倍野君!!」

本当なら声をかけない方が良かったのだろうが、晴也の安全を優
先すると声をかけざるを得なかった。

そうすると、相手は必ず梓の声に気づくことになる。

しかし、それはそれで梓にとって好都合でもあった。

相手への警告と、相手の虚をつくのには必要だったからだ。

そして、梓の思惑通りに般若面の者は声に気づいた。

「性懲りもなく矢で攻撃を試みるか……阿倍野晴也といい、君とい
い、面白い者ばかりだな!!」

矢は静かに梓の手を離れる。

空気を裂きながら、夜の闇の中を泳いで渡る矢。

それは般若面の者に接近すると3つに分裂してみせた。

銀色に輝く矢と、その横を並走するように飛ぶ一対の光の矢。

妖魔を倒す際にも使用された技だ。

般若面の者は当然の如くそれらの矢を食い止めようと、音壁を展
開させた。

しかし、結果としては銀の矢一本を食い止めたのみである。残る
2つの矢は般若面の者が纏うコートの両肘の辺りを掠めると、地面

に着弾する寸前に姿を消した。

「な……何なんだ、この2人は!!」

納得のいかない般若面の者は、この上なく狼狽してみせた。

狂者の如きその姿は、哀れでもあった。

気でも狂ったのか、当初の目的を忘れて般若面の者は梓に掴みかろうとした。

しかし、どこからともなく聞こえてきたそれを制止する声によって抑え込まれる。

「その辺にしときなよ……哀れだぜ、今のアンタの姿はよお……」

若い男の声。

今までその存在を感じられなかったのに、どうして。

「誰だ!」

「誰?」

梓と晴也がほぼ同じタイミングで声を上げた。

「仲がいいねえ……羨ましいぜ」

それを聞いて、再び男の声が聞こえてきた。

「その声……甘川国麿、だな?」
あまがわくにまろ

声の主の名と思しき名前を、般若面の者が呟いた。

般若面の者の言葉と共に、謎の声の主は姿を現した。

般若面の者のすぐ隣に。

そしてこう言った。

「そうそう、その通り。オレの名前は甘川だ。甘川国麿、以後お見知りおきを……とか言つとけばいいか？ にしてもダッセエ名乗り方だよなオイ！！」

第1章 麗しき射手（9）

「あ、もしかして自分で言っという何言ってんのこいつ？　とか思っただろ。はい正解、それ正解だから。そう思うのが普通だよね、うん」

謎の声の主は突然姿を現したかと思うと、突然わけのわからないことを言い出した。

目の前の男は変わった容貌をしていた。

天パ混じりのショートヘア。そのところが白く染められている。

しかし、その染め方は毛先だけだったり広範囲だったり頭頂部から毛先の中央部分だけだったりとまばらである。

身長は170センチほどで、スラっとした体格の男だ。お世辞にも筋肉質な体つきとは言い難い。

服装は白地に左肩から右脇腹にかけて弧を描くように黒いラインがプリントされた半袖のTシャツに、ダメージジーンズ。

そこに通された革製のベルトには悪魔と天使の彫刻された金具があしらわれている。悪趣味な装飾品だ。

右腕にはアナログの、左腕にはデジタルの腕時計というなんとも奇妙な状態だ。

年齢はおそらく20歳前後だろうと推測される。

そんな見た目から受ける印象は、「奇妙」そのものだった。

そんな風貌の男が突然目の前に現れたのでは、晴也も梓も戸惑いを隠せない。

それは、般若面の者として同じことだった。

更に意味不明な言動のせいで、尚更戸惑ってしまふ。

そんな中、般若面の者が初めに口を開いた。

「何をしに来た甘川……」

突然現れた男に対しての言葉だ。

2人の言動からして、知り合いか仲間といった関係なのだろう。だが、それにしては些かお互いの言動に棘があるように思われるが。

「何って、そうそう。アンタを連れ戻しに来たんだよね。上からの命令でよ、ちょっと暴れすぎじゃねえかってことらしいぜ」

甘川と呼ばれた男はアナログの腕時計を注視しながら般若面の者の問いに答えた。

端から見れば相手をバカにしているようにしか見えない行動だ。しかし、すでに呆れているのか般若面の者はそれを咎めるどころか意にも介していないようだった。

「上からの命令だと？ 何だって上はお前のような奇人を遣いに寄越したんだ」

般若面の者は乱れたコートを整えながら更に問い質した。

甘川の言うことが信用できない、そのように感じ取れることもできる言い方だ。

甘川の方もそれに気づいたらしく、こう言った。

「どうした、オレの言うことが信じれねえっての？ 当然っちゃ、当然だけどさあ……やっぱり凹んじまうよなあ!!」

言い終わるが早いのか、甘川は般若面の者を鋭い眼光で睨みつけた

かと思うと、両手のひらから緑色半透明の輪のようなものを放った。それは一直線に般若面の者をめがけて空気中を走り抜けると、腕の辺りで口を開くように輪の一部が開く。

手錠のような状態になったそれは般若面の者の腕を捕らえると、やはり手錠のように閉じた。

般若面の者の腕は自由が利かなくなってしまった。

「ちっ……貴様何をするつもりだ、甘川!!」

晴也と梓の2人に話しかける時よりも幾分鋭い口調で甘川に言う。その間にも般若面の者は甘川に対して空気を伝う振動による攻撃、音振を放つ。

間一髪、甘川は目の前に緑色半透明の風を巻き起こしてそれを受け止めた。

「だからさあ、言ってんじゃねえか。アンタを連れ戻しに来たってよお!!」

そう言う甘川は攻勢に出ようとした。

先ほどまで防御に使用していた風を手で手繰り寄せると、ソフトボール大の球形になったそれを両手のひらの上で浮かばせる。

風の球は辺りの空気を取り込んで大きさを増していく。

ソフトボール大だったそれはハンドボール大になった。

「おい、お前ら仲間同士じゃないのかよ!」

甘川と般若面の者とのやりとりを見ていた晴也が声を上げた。

無意識の内にズボンの右ポケットを手が押さえている。

「ああ? なんなの、お前。今いいところなんだよねえ……邪魔す

んならさあ、お前も一緒に痛めつけてやるぜ!!」

行動を邪魔された甘川は攻撃の対象に晴也も捉えた。

甘川は舌打ちをすると同時に手のひらの上で浮かんでいた風の球を握りつぶす。

すると、握力によって崩壊したそれはたちまち姿を変えた。

右手では握り拳の各指と指の間から姿を見せる短く鋭い突起物はRPG等という爪のようであり、拳の両サイドからは伸びる薄く平たいナイフのようなものが姿を見せる。

対する左手では緑色半透明のトンファ―状に姿を変えていた。いつ攻撃をしかけられてもおかしくない。

しかし、対する晴也は武器を持ち合わせていない。対抗するための魔能も発動までにラグがある。

これでは圧倒的に不利な状況だ。

梓は弓と矢を持つてはいるが、できることなら梓には戦って欲しくない。晴也は考える。

ならば、自分の力でどうにかする以外には方法は残されていない。

「神村さんは下がってて」

梓に下がるように促すと、反対に晴也は甘川の方に向かって歩みを進める。

戦闘経験は一本踏鞴との戦いと先ほどの般若面の者との戦いのみ。運動神経もそれ程よくはないと自覚している。

勝てる見込みはほとんどない。

だが、それでも戦うしか方法はない。

「やってやる、やってやるよ!!」

甘川への宣戦布告の言葉を発する。それには、自分自身に気合を入れるという意味も込められていた。

「いいねえ……いい!! 精々オレを楽しませてくれよ、安倍野晴也!!」

そう言い放つと、甘川は勢いよく地面を蹴り飛ばして晴也に接近してきた。

風を纏った突進が迫りくる。

追い風を発生させてそれを利用することによって相当の速さで移動しているようだ。

そのあまりの速さに防御の体勢を取る暇もなく、すれ違いざまに左手に持ったトンファーによる一撃が後方から晴也の左脇腹を直撃する。

その瞬間に甘川の狂気にまみれた残忍な笑みが晴也の瞳に映る。冷酷極まりない無慈悲な仮面が目焼き付いて離れようとしないうちに、それによってもたらされた恐怖があまりにも大きいのだろうか、痛みを感じることにすら忘れてしまったらしい。

あれ程の威力で打撃が叩き込まれたというのに一切の痛みが感じられないとは。

だが、そのおかげでまだ戦えそうだ。

左手に握り拳を作りそこに力を込める。妖魔や般若面の者との戦闘で使用した技の発動前の構えだ。

拳に精神を集中させる。

甘川が再度攻撃しようとしてきたその瞬間、そこそがチャンス。そう信じて待ち構える。

「おいおいどうしたあ!! びびってなんにもできねえのか?」

反撃をしてこない晴也に痺れを切らしたのか、甘川は人の精神を

逆撫するような口調で声を張り上げた。

相変わらずの狂気に支配された笑みを顔に留まらせたまま。
しかし、それでもなお晴也からの反撃がくる様子はない。

「威勢だけはいいい、結局はお前も口だけのガキかよ……あーあ、つまんねえな。まあ、最後までこのオレに付き合ってもらうがな!!」

待ちくたびれた甘川はついに動きを見せた。

先ほどと同じように地面を蹴り飛ばし、晴也に急接近をしかける。
やはり追い風を発生させた上での急加速。

だが、晴也はそれを避けようとはしなかった。

ただ、極限まで精神を集中させた左拳を右手のひらに叩きつける。
晴也が取った行動はそれだけだった。

左拳から右手を伝って身体を何かが包み込むような感覚が晴也を襲う。

しかし、それは不快感を伴うものではなくむしろ保護されている
という安心感を伴うものだった。

甘川は晴也に最接近したその瞬間、爪状に変形した風で切り裂く
うと右腕を振り上げた。

そして間髪容れずに腕は勢い良く降り下げられ、晴也を右肩から
背中の中央にかけて切り裂く。

——はずだった。

というのは風でできた爪が晴也の身体に触れようとしたその瞬間、
突如としてその姿を消したからだ。

甘川としては予測外の出来事だった。

「これは……そうか、そういうことかっ!! まさか陰陽術をこの

ような形で使うとはっ！！ 前言撤回、おもしろい、おもしろいぞ
阿倍野晴也！！！」

しかし、甘川はそのことに動揺するどころかこの状況を楽しんでいるようだった。

「あらゆる空間に存在する木・火・土・金・水ごんの五要素の増幅・半減を得意とする陰陽術。それを利用して金の属性を可視化寸前まで増幅してオレの風爪から身を守るとはな……なかなか面白いことをやってくれるじゃねえか！！！」

言いながら甘川は晴也と距離を取る。

「まだやるのか、甘川とかいう男！」

甘川の方に向き直って晴也がそう言う。

「ここからが楽しいんじゃないか！！ お前ももっと楽しめよ、力と力のぶつかり合うこの快感をさあっ！！！」

甘川は左手に持っていた風で作られたトンファーを右手に持ち変えると手のひらの中でそれを握りつぶした。

崩壊した風は甘川の腕を包み込むように移動する。

「僕にはお前の言っていることが理解できない！！ 戦いが楽しいだって？ そんなのどうかしてる！！！」

甘川の言葉に反論しながら晴也は左手の拳に力を込める。

——僕がこの男に敵うのか？

晴也が頭の中でそう呟くと、脳の中に直接声が響く。伊舎那天だ。

『自らの力を信じよ。負傷することは気にするな。先刻のように我が即座に回復してやろう』

――なら、さっき甘川の攻撃を受けても痛みを感じなかったのは……

『そうだ。この際伝えておくが、汝は可能性をすぐそばに宿している。もつとも今回それは必要ないとは思うが……さあ、己が力を信じて行け!!』

意識が現実に戻される。

伊舎那天の言っていた可能性とやらが気になるが今はそれどころではない。

前方の甘川は口角を上げてニヤリと笑う。

それを見て晴也は歯を強く噛み締める。

それが開戦の合図だった。

「行くぞ、阿倍野晴也 ああ!!」

先に動いたのは甘川の方だった。

風を利用して一瞬の内に晴也の目の前に姿を現す。

防御する暇など与えてくれそうにない。

次の瞬間、風を纏った甘川の右腕が晴也の腹部を直撃した。

衝撃の加わった一瞬だけ全身に痛みが走るが、すぐに痛みは消えてなくなる。

伊舎那天の言っていたことは嘘じゃないようだ。

反撃しようと晴也も左腕を振るうが、利き腕ではないためうまく扱えない。

勢い良くふるった腕も空を切るばかりで標的の甘川には掠りすらしない。

「魔能は使えるようだが肉弾戦はイマイチみたいだな!!」

隙をついて放たれた回し蹴りが晴也の右腕を蹂躪する。

伊舎那天の力がなければおそらく骨が折れていただろう。

攻撃が当たったという実感はあるのに痛がる素振りを見せない晴也に対して甘川は不信感を抱いた。

強がっているだけか、それとも……

——まあ、どっちにせよぶっ潰すのは変わらないがどう考えてもおかしい……手加減したつもりはないのにまるでダメージを負っていないみたいじゃねえか

「ちっ……こんなところであの力を使ったかねえんだよな……」

晴也に聞こえないように甘川は呟く。

「まだ終わってないぞ!!」

甘川が気を抜いた一瞬の隙について晴也が攻撃に出る。

左腕を大きく振るって甘川に殴りかかった。

晴也の動きに気づいた甘川は右腕で殴りかかり防御しようとする。

晴也の左拳と甘川の右拳が正面から衝突し轟音を鳴り響かせる。

拳同士の衝突の瞬間、2人はお互いから何かを感じ取った。

——僕と同じ力……まさか!

——オレと同じ力だと？ まさか、な

衝突したそのとき、一瞬ではあるが2人の背後から人影のようなものが覗いたように思われる。

しかし、すぐに消え去ってしまったためにその真偽は確かめようがない。

衝突の衝撃で2人は吹き飛ばされてコンクリートの床に身体を叩きつけられる。

「これだよこれ！！ この痛み、戦いの痛みこそが生きている実感をオレに与えてくれる！！」

起き上がりながら時折笑いを挟んで甘川が言う。

そして高笑いをしながら続ける。

「生きてる、確かにオレは生きているぞ！！ そうだ……これこそが生というもの！！」

第1章 麗しき射手（10）

「神村梓、君は甘川と阿倍野晴也の戦いを見てどう思う？」

晴也と甘川、2人の魔能者による戦いが一旦落ち着いたそのとき、傍観に徹していた般若面の者が同じく戦いを見守っていた神村梓にそう問いかけた。

あまりにも苛烈なその争いに介入する余地はないと悟った2人は傍観を決め込むことにしていたのだ。

2人の男による熾烈な戦いは経験・技量という点から圧倒的に甘川の方が優っているのは自明だ。

「認めたくはないけど……阿倍野君の方が明らかに不利よね。あなたもそれがわかっていてどうしてこんな質問を？」

それを聞いて般若の顔を象った仮面の裏から僅かな笑いがこぼれ出る。

しかし、それは侮蔑や嘲笑の意味ではない、と聞いていた梓は感じ取った。

「君だって、すでに気づいているのだろう？ 阿倍野晴也から感じる違和感に」

般若面の者の言うとおりであった。梓もまた、晴也に違和感を感じていた。

目の前にいる般若面の者との戦いするときとは晴也の動きが全く異なっていたからだ。

躊躇いや戸惑いのようなものが一切感じられない動き。傷つくことを恐れていないかのような動き。

そのうえ般若面の者との戦いとは打って変わり、強烈な一撃を受けても何食わぬ顔で戦いを続けている。

「確かに、あんな強烈な一撃を受けたのに平気そうでいるのは不自然……それにさっき一瞬だけ見えた人影みたいなのも気になる……」

晴也と甘川の方に視線を向けながら般若面の者の言葉に答えた。

「やはり君も同意見か。今から話すのは単なる噂ではあるが……こんなことを聞いたことがある」

晴也と甘川を一瞥してから般若面の者は言葉を続ける。

「俗に言う神との契約を結んだ魔能者がいる、とな。そして、神と契約を結んだ魔能者は本来の能力よりも強力な力を得ることができらしい。無論、噂で聞いただけで直に見たというわけではないが……」

般若面の者はあくまでもそれが噂であることを強調する。

もしその裏に他意があったとしても般若の面が邪魔で表情から窺い知ることはできない。

「あなたは阿倍野君から感じる違和感の原因がそこにあると考えているの？」

そう言いながら梓は般若面の者を怪訝な視線で睨みつける。

敵対する者の言うことだ、どこまで信用できるかもわからない。

それが面を着けたものの言葉なら尚更。

そこから発せられる言葉にも、偽りという仮面を被っているかもしれないのだから。

「阿倍野晴也の様子や先ほど2人の背後に見えた人影のような物から推測した可能性の1つ、というだけのことだ」

梓の心境を知ってか知らずか、般若面の者は問いに淡々と答える。

「あの2人が神と契約を結んだ魔能者という可能性もある、ということでしょう？」

梓は更に問いを投げかける。般若面の者がどこまでそのことについて把握しているのか、それが知りたかったからだ。

「それは2人に聞いてみなければわからないな。ただ、一瞬だけ見えた人影に暫定的な答えを与えるとすれば、その可能性はなきにしもあらず、だがな」

しかし、般若面の者は曖昧な回答をするだけに留まった。

可能性、という言葉で言葉を濁した般若面の者に梓の非難の視線が注がれるが、般若面の者が言葉を続けることはなかった。

梓と般若面の者の会話がフェードアウトしたのと同じ頃、晴也と甘川の方に動きがあった。

「まさかこれで終わり、なんてことはないよな!？」

起き上がり体勢を整えた甘川は未だコンクリートの上に横たわる晴也に言葉を投げかける。

コンクリートの無機質な冷たさが晴也の皮膚を直撃し、刺激を与える。

やはり傷が即座に癒えるというだけで、痛覚そのものが遮断されているわけではないようだ。だが、刺激そのものも全てが脳に伝えられるかという点、そうではない。

今はコンクリートに皮膚が接し続けているから刺激が断続的に伝えられているが、殴られるなどで与えられた刺激は一瞬痛みとして感じるだけですぐに消え去ってしまう。

おそらく、伊舎名天の力による高速再生、その副作用が神経に影響を及ぼしているのだろう。

甘川の言葉から少し経ち、立ち上がる気力を取り戻した晴也はコンクリートに手を付きながら身体を起き上がらせる。

その視線の先には楽しそうな笑みを浮かべた甘川の姿がある。

そしてその右手には剣状に纏められた風が保持されていた。

それを見て晴也も戦いを続行することを宣言する。

「そんなわけ……ないだろ！」

そう言いながら晴也は左の拳に気を纏わせる。

今までよりも強く、限界まで左の拳に意識を集中。甘川が動き出すのを待つ。

そして次の瞬間。

「そうだよなあ、そうでなくっちゃなあ！！ もっとこのオレを楽しませてくれよ、阿倍野晴也あ！！！」

そう叫びながら甘川が動き出した。

まずは間合いを詰めつつ風の剣で前方を一薙ぎ。辺りの空気を巻き込みつつ衝撃波が晴也に向けて放たれた。

しかし、晴也は前方に壁をイメージし、左拳に溜めた気の一部から可視化寸前まで土の要素を増幅して作り出した見えざる壁で衝撃波を受け止める。

晴也はそのまま続けて防御に利用した土の要素を不可視の弾丸として甘川に向けて放つ。

しかし、極限まで増幅された要素というものはエクトプラズムによる干渉を強く受けている。そのため、ある程度の力を持った魔能者ならばエクトプラズムの流れを読み取ることも不可能ではない。

甘川はその軌道を難なく見切ると、自らの風の刃にエクトプラズムを流し込むことで強度を増し、迫りくる弾丸を全て空中で破碎する。

「お前を楽しませる気はない！！　ただ、僕にはこうしなければならぬ理由があるから……だから戦う！！」

甘川が防御に走った一瞬の隙をつき、晴也は攻勢に出る。

左拳をコンクリートの床に叩きつけた。痛みが全身に走るがすぐに消えてなくなるのでさしたる問題ではない。

それから数瞬、見る見るうちに植物の根のようなものがコンクリートを打ち破り大量に姿を現した。

それらは甘川目掛けて意思を持つかのように蛇行する。

捕まるまいと甘川は風の剣で幾度もなくそれらを切り裂く。

倒した、甘川がそう油断したと思われるその瞬間、それらは瞬間に再生して再び甘川に襲いかかった。

不意を突かれたであろう甘川は剣を持っている右腕を絡め取られて抵抗できなくなる。それに続けて左腕、両足も強力な力で掴まれて身動きが取れなくされた。

それを確認すると、晴也は木の根に別の力を左拳から流し込む。すると、甘川を押さえつける木の根から煙を上がり始めた。晴也が流し込んだ力、火の要素が木の要素から作り出された木の根に作用して燃焼を始めたのだ。

陰陽術というものは周辺に存在する木・火・土・金・水の五要素

（五行）を増幅・半減させることを得意としている。陰陽術の特性上、要素を増幅させて実体化させることは不可能ではないが、専門外の術のため発動には多大なエクストリズムを消費し、それに応じてエクストリズム発光に移行する危険性も伴う。

そこまでのリスクを冒してまで使用する必要もなく、それに特化した行操術を得意とする魔能者がいるため陰陽師が要素の実体化を行うことはほばないと言っても過言ではない。

しかし、それは魔能というものをよく理解した者に限っての話だ。今日初めて魔能に覚醒した晴也がそんなことを知る由もない。

だが、だからこそこのような行動に出ることができ、その結果甘川を拘束することに成功したというのもまた事実だ。

「さあ、話してもらどうぞ。お前たちが何者なのか。何が目的なのか」

甘川を拘束することでアドバンテージを得た晴也は強気の口調でそう言う。

しかし、甘川からの返答はない。

ただ沈黙を続けたまま顔を俯かせて木の根による拘束を受け入れているだけだ。

「話さないつもりなのか？　だったら……僕にも考えがある」

そう言っつて晴也は木の根の一部を僅かに力の残る左手で掴む。

これが晴也にできる最大の脅しだった。甘川に答える気がないというのなら左手から直接力を流し込んで木の根ごと燃やす、という意味表示だ。

そこまでされてようやく観念したのか、甘川がその口を開いた。

「どうした、それで勝った気にでもなったのか？」

だが、返ってきた答えは予想外のものだった。

晴也の問いに答えるわけでもなく、むしろ晴也を挑発するような言葉を発した。普通なら負け惜しみと取られてもおかしくはないのだが、静かに上げられた甘川の顔に浮かぶ自信満々な形相が負け惜しみではないと、そう主張している。

「オレが何の考えもなしに無様にも捕らえられると思ったか？」

「どういう……ことだ？」

動揺を隠しきれぬ晴也は声を震わせながらそう答える。

その様子を見て甘川は時折笑いを挟みながら、晴也の言葉に続けた。

「つまり……こういうことだ!!」

言い終わったその瞬間、甘川の肌の上を滑るようにして風の刃が無数に走った。

それらは甘川の手足を拘束している木の根を悉く斬り刻んで視認できる限界の大きさへと変貌させていく。

今の今まで甘川を拘束していた木の根はものの数秒のうちに無価値な木片へと成り果てたのだ。

あまりに速いその動きは目で追うことが困難なほどだ。

「久しぶりに楽しませてくれた札に教えてやるよ。今発動したのは『祇園嵐装』ぎおんらんそうという能力の一部だ。祇園精舎の護神、牛頭天王しじうてんのうとの契約でオレが得た力のな。この力は己の身体を風に変質することができる。さっきのもその応用に過ぎない」

あまりに突然の出来事で頭の中の整理ができずに呆然と立ち尽くしていると、甘川が一方的に語りかけてきた。

「まさか何を言ってるかわからない、なんて言わないだろうな。お前だって契約を果たした魔能者なんだろう？」

晴也とて甘川が契約を果たした魔能者であるということは薄々感じ取っていた。

だが、それでも面と向かってそうと言われるとやはり驚かずにはいられない。

どう返答するべきか全く思いつかない。驚きの連続で脳が悲鳴を上げているせいだ。

やっとの思い出頭の中に浮かんだ言葉をなんとか繋ぎ合わせて言葉漏らす。

「だけど……それと捕らえられたことに何の関係が……」

「関係なら大いにある。エクトプラズムの流動パターンを読み取るためさ。お前の魔能は陰陽術だ。それが得意とするのは周辺に存在する五要素の増幅・半減。実体化は得意としていない」

そこまで言うと、一旦言葉を止めた。

ただ聞いているしかない晴也に向かって甘川は歩を進める。

腕一つ分の距離に來た辺りで足を止めて言葉を続けた。

「得意としていない術の発動には多大なエクトプラズムが使用される。ならば必然的にあの木の根は強力なエクトプラズムを帯びているはずだ。そうになると、エクトプラズムはより強く感知することができる。そのうえ身体に直接触れるとなるとエクトプラズムの流動パターンを読み取るのは更に容易となる。そうして読み取ったエクトプラズムの流動パターンからその脆弱なポイントを突くようにして身体を変質させて風の刃を発生させれば厄介な木の根も容易く崩壊させられる、というわけだ」

そこまで計算した上での行動。それは晴也の威勢を削ぐには十分な効果をもたらし、また晴也と甘川との実力差を顕著な物にした。

晴也は思い知らされたのだ。伊舎那天との契約で少し力を得たからといって自分が有頂天になっていたことを。

自分が異なる視点から物事を考えられていなかったことに。己の力不足に。

「オレにここまでさせたことは賞賛に値する。それは褒めてやろう。だが、それはあくまでもお前の能力に対してだ。お前自身に対してではない、ということは言うておく」

そう言い終わると、甘川は晴也の襟元に右手を延ばして思いきり掴み取る。抵抗する気力が今の晴也には残っていない。

そのまま甘川の方へと腕一本の力で引き寄せられて持ち上げられる。

その様はさながら歴戦の英雄に鬨り殺しにされる雑兵の如く。とはいえ、甘川が英雄たる器かという疑問符が頭の上に浮かぶのは致し方ないことだ。

「さて、そろそろ終わりにしようか、阿倍野晴也。オレたちの目的は神村梓をオレたちの所属する組織、《国津地祇》くにつちぎの仲間に引き入れることだ。お前をどうしようと関係はないのでね」

空いている左手に爪状に纏められた風を発生させて晴也の首元に徐々に近づける。

刻一刻と死の時が迫っている。晴也が伊舎那天との契約によって得た力を知らない甘川は少なくともそう思っただろう。

だが、伊舎那天との契約がある以上——伊舎那天が裏切らなければ、晴也がこのまま死ぬということはない。

「どうだ、阿倍野晴也。死ぬのが怖いかな？ 怖いだろうなあ！ だがな、その感情こそが生というものを実感させてくれるんだよ！！」

遂に、爪状の風が晴也の首元に触れた。

それと同時に首の皮膚が小さく切り裂かるとどうじに血管も傷つけられて血がジワリと溢れ出てくる。

「やめて！！ 阿倍野君にそれ以上手を出さないで！！ わたしが……わたしがあなたたちの仲間になれば……それでいいんでしょ？ だったら……」

その様子を見かねた梓が涙交じりの声で甘川に懇願する。

なんとか晴也だけでも助けたい、その一心で。

元はといえば自分が妖魔退治を優先して学校に踏み込んだのが間違っていた、という自責の念に駆られて。

あるとき晴也だけでも帰らせておけば、という後悔と共に。

なんとしてでも晴也を殺させはしない。目の前で人が死ぬのは二度と見たくない。そのためなら自らの身を投げ打ってでも。

「話がわかるねえ……だがな！！ もう遅い。少し力を入れれば首をグサリ、だ」

梓の言葉を聞いても甘川はその手を止めようとはしない。

しかし、それは般若面の者の目から見てもやりすぎだと感じたのだろう。だが、般若面の者が甘川を制止しようと声をかけても甘川はそれを聞き入れようとはしない。

「恨むのなら……魔能者に覚醒した運命か、オレと出会った運命を恨むんだな！！」

そして爪状の風が晴也の首を貫こうとしたそのとき、屋上へ新たな来訪者が爆音とともに現れた。

「そこまでしておけ……それ以上俺の生徒に手を出すんじゃない
！！」

第1章 麗しき射手（終）

あまりの音にその場にいた全ての人間がその方向を振り返った。すると、そこには無残にも砕け散ったドアの破片と、竹刀片手に威風堂々たる様で仁王立ちする屈強な男のシルエットがあった。

「鬼島先生っ！！」

それを見た梓が即座に叫ぶ。

そう、そこにいたのは雷同高校の体育教師、鬼島亮治その人だったのだ。

鬼島の姿を目にした途端、甘川の顔色が、表情が明らかに変わった。

それは鬼島も同じで、甘川の姿を見るや否や元から険しい顔が更に険しい表情になる。

「まさかここでまたアンタと会えるとはなあ……鬼島！！」

甘川は怒り心頭の形相でそう言う右手で掴んでいた晴也を投げ捨て、鬼島に歩み寄る。

強烈な勢いでコンクリートの床に叩きつけられた晴也は伊舎那天の力のおかげで傷を負うことはなかったものの、頭に加わった衝撃に意識を飛ばしてしまっていた。

それを見て、梓は投げ飛ばされた晴也の元に駆け寄る。

「阿倍野君！！」

晴也の元に辿り着いた梓は側に座り込み、自らの太腿の上で晴也の頭を抱えるような態勢をとる。

そうして、必死に晴也の名を呼び続ける。返事はないものの、僅かに晴也の身体が動くのを見て梓はほっと一息つく。

「よかった……」

一方、鬼島と甘川の方では。

「よお……久しぶりじゃねえか、甘川」

そう呟くと、鬼島も同じように甘川へと歩み寄る。

それと同時に竹刀を握る右手に力が加わる。

無意識のうちの警戒心が鬼島にそうさせたのだ。

「この3年間、オレがどんな気持ちで今まで過ごしてきたか……ア
ンタにわかるか？　なあ、鬼島さんよおっ！！」

そう怨嗟の言葉を吐き出しながら、左手に発生させていた風を剣
状に変形させて甘川も臨戦体制を取る。

「あのとき……漆黒の氾濫のあの日、私はああするしかなかった。
そうするしか仕方がなかったのだ！！」

そう告げた鬼島の言葉に甘川の表情が憎悪の色に染まってゆく。

甘川が求めていた言葉を鬼島は口に出さなかった。それどころか、
仕方がなかったなどという諦めとも取れる言葉を発した。

仕方がなかった——その言葉が甘川の理性を亡き者にした。

そして、またも戦闘の幕が開く——

鬼島の言葉に理性を失った甘川が、左手で保持していた風剣を両手で握り袈裟斬りの要領で斜めに振り下ろす。

風音と共に刃が迫りくるも、鬼島はそれを自らの魔能、霊力刀を発動させてエクトプラズムを纏った竹刀で受け止めた。

エクトプラズムによって強度を得た非物理的な風の刃と物理的な刃とが切り結び、本来では有り得ぬ剣戟の音が辺りに鳴り響く。

幾度かそれが繰り返された後、2人は互いに間合いを取り第二撃目に備えた。

「仕方がなかった……だと？ ふざけたことを抜かしてんじゃねえっ！！ 散々『生徒を守ることが我々教員の使命だ』なんて言っておきながら……あのときアンタはオレを見捨てた……そうだろうっ！！」

そう言いつつ、甘川の怒りからの強烈な一撃が繰り出される。

左から右へ薙ぐようにして放たれた一閃を後方への軽快なステップで避けるも、それと同時に放たれた風が鬼島を追撃。しかし、それをものともせず甘川が晴也にしたのと同じように、迫る風を霊力刀で打ち砕く。

だが、甘川の攻撃は激しさを増す一方だ。怒りに支配された故か甘川の剣筋が乱れている、鬼島はそう感じ取る。

「見捨てるつもりなど……なかった!!」

鬼島はあくまで防戦一方。自ら攻撃をしかけることはない。甘川の攻撃を霊力刀で受け止め続ける。

甘川の、剣に乘せられたその思いを、怒りの心をただ受け止め続ける。受け止め続けようとする。

「だが、アンタはオレよりも奴らを優先した。必ず戻る、そう言い

残してオレの元を去った。しかし——戻ってくることはなかった！
！　このどこが……見捨てていないなどというつもりだ！！」

言いながら甘川は両手で握り締めていた風剣を中心に左右二振りの剣に分裂させて二刀流のスタイルを取る。

一撃の威力は半減するがその分取り回しが利き易く、素早い攻撃が可能となる。

右、左と連続した攻撃が出鱈目に繰り返される。

攻勢に出ようにも、守備することにしか専念できない状態だ。もつとも、今の時点の鬼島には甘川を攻撃する意図などないのだが。

「そうしなければ、更に多くの生徒が生命を危険に晒すことになっていた。だから私は、不本意ながらも彼らの救助を優先したのだ」

甘川は鬼島の弁明に耳を貸さず、更に攻撃の速度を上げていく。

だが、今まで、防戦するのみであった鬼島も遂に観念したのか竹刀を持つ手に力を加える。

そして、不可視の体外物質エクトプラズムが瞬間的に竹刀に流し込まれる。爆発的に増加したエクトプラズムが竹刀のキャパシティを越え、力が暴発する。

その瞬間、竹刀と切り結びあっていた左右二振りの双剣は甘川の身体ごと弾き飛ばされた。

あまりに大きな力に鬼島も身体を吹き飛ばされそうになるが、持てる力の全てを尽くしてその場に踏みとどまる。

甘川も流石なもので《祇園嵐装》の力を利用して身体を瞬間的に風に変化させ、身体に加わる負荷と、その後に加わるであろう衝撃を全て辺りの空気に受け流した。

僅かな時間の後、風から肉体へと身体を再び変換させて次なる攻撃を繰り出さんとする。

「口では、なんとも言える!!」

鬼島の言葉を一蹴しつつ、両手の双剣をあたかもダガーであるかの如く鬼島に向かって左右時間差を付けて投擲。空を走る風から作られた刃は風を切るのではなく、辺りの風向きを進行方向に変更させて追い風として速度を増し続ける。

高速で虚空を駆ける2つの刃。僅かに緑色をしていて可視状態であるとはいえ音速に匹敵するほどの速さで迫りくる刃の軌道を目視で追うのにも限界がある。

そこで鬼島が取った手段はエクトプラズムのパターンからその軌道を読み取ることだ。奇しくもそれは甘川が晴也の攻撃に対して取ったのと同じ対処法であった。

一瞬のうちにエクトプラズムの流れを感じ取り軌道を割り出す。

その結果、左から放たれた刃が鬼島の右肩を、右から放たれた刃が左脚大腿部を狙っていることが判明した。

軌道がわかってしまえば迎撃など容易い。それに甘川が時間差で放ってくれたことも幸いし、一度も鬼島の身体に触れることもなく竹刀の斬撃に刃はそのどちらも消滅した。

「なかなかの腕前じゃないか。それほどまでに私のことが憎かったのか、甘川？」

鬼島の問いかけに甘川は黙って首肯する。当然だ。鬼島に裏切られたと考えている甘川がそう考えるのは妥当なこと。

それは鬼島にもわかってのことだった。だが、それでも敢えて鬼島はそう問うたのだ。

自らの罪を再確認するために。

自分のしたことが甘川国麿という人間をどれほどまでに狂気へと至らしめたのかを確かめるために。

「オレは誓った。アンタが覚醒させたこの力でアンタに復讐するってなあ！！　だから牛頭天王ごずてんのうとの契約も受け入れた！　より強い力を手に入れるためにっ！！」

その言葉とともに甘川はまたも風から武器を生み出す。次に現れたのは刀状に収束した風だった。

それを構えて甘川は攻撃の体勢をとる。それに呼応するかのよう
に鬼島も竹刀を構える。

その結果、校舎屋上のコンクリートを舞台にして、風景にはいさ
さか不釣り合いではあるが時代劇さながらの様相が展開される。

「私に復讐するためか？　そのために力を求めているのか！！」

まだどちらも動こうとはしない。般若面の者も、神村梓もそれを
止めようとはしない。いや、止められぬほどの気迫が甘川と鬼島の
2人から感じられるのだ。

お互いに精神を極限まで高め、集中力の全てを斬り合うその一瞬
に注ぎ込む。

鬼島と甘川、2人の間に緊迫した空気が流れる。お互いの呼吸の
音が、心臓の鼓動が聞こえそうなほどの静寂が辺りを覆う。

数度の呼吸音の後、いちばん大きな呼吸音、深呼吸の音がお互い
の鼓膜を振動させた。それでお互いが覚悟を決めたことを悟る。

そして――2人はほぼ同時のタイミングで動き出す。

鬼島はコンクリートの地面を勢いよく蹴り飛ばし、甘川はコンク
リートの地面を滑るようにして蹴る。そうして、互いが相手を自ら
の得物のリーチ内へと捉えた辺りで一度着地。

そこから続けて鬼島は攻撃を仕掛ける。先ほどエクトプラズムを
意図的に暴発させたときに吹っ切れたのだろうか、遂に能動的な攻

撃に出た。

一旦、目の前で竹刀を両手で構え、即座に竹刀を両手ごと自らの右脇腹の方へと引き付ける。

「虚斬・三日月閃!!」

その掛け声とともに、そのまま竹刀を上方へと振り上げて狙いを定め、甘川の左肩に向けて振り下ろす。そこから右脇腹へと弧を描くように、竹刀を勢いよく移動させる。竹刀が動いたその軌道は正に、三日月の如くである。

一見するとそれは袈裟斬りのようであるが、その軌道は器用に心臓のある辺りを避けており、たとえ真剣であっても相手を即死させるようなものではない。当然、今鬼島が使用しているのは竹刀であるため、余程のことがない限り相手を即死させることなどない。

だが、甘川はそれを避けるわけでもなく、風刀で受け止めるわけでもない。そこから微動だにせず、身体を風に変換させて空間そのものに衝撃を受け流したのだ。

そうになると、必然的に甘川がダメージを受けるはずがない。だが、風を肉体に再変換させて姿を現した甘川の顔には苦悶の表情が浮かび上がっていた。

その場にいた晴也を除く誰もが、その様に思わず注視していた。

「くっ……今のは、何だ……!!」

甘川は空間に衝撃を受け流せたと確信していた。なのに、これほどにもダメージを負っているとはどういうことなのか。それが解せず思わず言葉に出してしまったのだ。

「言ったはずだろう? 虚斬・三日月閃、とな」

「……!?!」

再び鬼島の繰り出した技の名前を聞き、甘川の眉が僅かに動いた。どうやら、なんとなくではあるがどういふことなのかを感じ取ったらしい。

その様子を見て鬼島が続ける。

「目に見える物と見えない物、どちらを人は信用するか。それは当然目に見える物の方だろう。自らの目で確認できる、という事実はそれだけで信用する根拠として十分なものだからな。だが、目に見えない物は直に確認できない以上、信頼性に欠けてしまう。今の技、虚斬・三日月閃はそれを利用した技だ。竹刀による攻撃を真実だと誤認させることで、その後にくくエクトプラズムによる攻撃を予感させなくする。竹刀による攻撃は虚構で、エクトプラズムの空間干涉能力による攻撃こそが本命、つまり真実。それが、虚斬たる所以だ」

そこで一呼吸置き、更に言葉を続ける。

「自らの身体を風に変換させることで、相手にそこに自分は存在しないという虚構を見せているお前がまさかこんな簡単な罠にも気付けないとは……まだまだ力不足のようだな、甘川。どうする？　まだ、戦いを続けるか？」

全てを語り終えると、鬼島は竹刀を目の前に投げ捨ててこれ以上の戦意はないことを示す。勿論、甘川にそれでもまだ戦う気があるというのなら鬼島は戦いを続行する気にいる。

目の前には3年間恨み続けた相手がいるのだ。いわば今は復讐を遂げる絶好のチャンスなのだ。

だが、今しがた鬼島の力を見せつけられたばかりだ。恐らくは今の技でも鬼島の実力のほとんどは発揮されていないだろう。

3年前、漆黒の氾濫のそのときに魔能者として覚醒したばかりにもかかわらず、阿修羅の如く妖魔を蹂躪した鬼島の姿をその目で見ただけだからこそ、そのことがよくわかっていた。

このまま本気でかかってこられると、十中八九自分は敗れるだろう。そう踏んだ甘川はこの場合は潔く退散することを選んだ。

そしてその旨を口頭で伝える。だが、それは鬼島に対する言葉としてではなく、あくまで般若面の者に対する言葉としてだ。

「……もういい、これ以上は意味がない。引き上げるぞ!!」

般若面の者に向かってそう言うと、甘川は発生させていた風刀を霧消させ、それと同時に般若面の者の両腕を拘束していた風の輪を解除する。

「いいのか、甘川？」

般若面の者が些か怪訝そうに問いかける。あれほど鬼島という男に固執していた割には、あっさりと引き下がるのだな。そう思ったからだ。

もっとも、般若面の者もこの辺りで退いておくべきだと考えていたので、甘川の決定に異存があるわけではない。

「ああ、どうせなら、この男にはあの日のあの場所で、オレと同じ苦しみを味わわせて罪を懺悔させてやるさ。そうしなければ……オレの心に燦る復讐の炎は、消えはしないからなあっ!!」

半ばヤケクソの、負け惜しみ混じりの言葉を甘川は発する。

その後に甘川の言葉が続かないと判断した般若面の者は最後に一言。

「ふむ……では、今日はこれにて失礼するでしょう。また会うときを楽しみにしているよ、神村梓。阿倍野晴也にもそうお伝え願いたい」

一礼をして、般若面の者は屋上の端へと歩んでゆく。それと同時に甘川は身体を風に変換させて姿を晦ます。

屋上のフェンス近くに辿り着いた般若面の者は魔能でフェンスを突き破りそこから飛び降りると、夜闇に姿を消した。

2人の姿が完全に消えたのを確認すると、梓は鬼島に問いかけた。晴也はまだ気を失ったままだ。

「先生、どうしてここに来たんですか？ 妖魔は、どうなったんですか？」

まくしたてるような口調でそう問いかけた。鬼島はその問いに対して、淡々と答える。

「ああ、そのことか。妖魔共の相手をしていると、奴らが突然屋上の方へ向かったのだな。何事かと思いここに駆け付けたのだ。辺りにいた妖魔はその道中に殲滅しながらな。恐らく、エクトプラズム発光に惹きつけられて妖魔が集まったのだろうな」

「そうだったんですか。それで……もう1つ聞きたいことがあるのですが……」

先ほどの問いに対する答えには満足したものの、続けて鬼島に質問を投げかける。どちらかというと、梓としてはこちらの方が聞きたいことだった。

だが、いきなりこのようなことを聞くのはどうかと、そう思った

結果、まずは当たり障りのないことから問うたのだ。

「何だ？　言ってみろ。私に答えられる範疇の質問なら答えよう」

梓の質問の内容を予め推測しているのか、答えられる範疇で、という条件付きで問いに答えることを承諾。

そして、梓は鬼島に問う。

「先生と……さっきの、甘川とかいう男の人はどういう関係なんですか？　見た限りじゃ知り合いだったみたいですが？」

「やはりそのことか。全てを語る気はないが、あいつは私の元教え子だった男だ。元々は争いを嫌う、大人しい……そうだな、阿倍野のような生徒だったのだから。漆黒の汜濫のときにあることをきっかけにして、あんな風になってしまったのだ。そのことについて、私は少なからず関係している。だから、あいつは私に復讐しようとしているのだ」

そこまで言うと、鬼島は口を閉ざしてしまった。いつもの厳ついイメージからはおおよそ想像もつかない威勢を失った鬼教師の姿が、そこにはあった。

昔のことを話しているうちに、鬼島は気がつくと思傷に浸ってしまっていたのだ。

「元ってことは……その、つまり」

梓の言葉に我を取り戻すと、一度首を左右に振ってから左手で顔を押しさえつける。

「その通り、あいつはその一件以降、この高校を退学という形で去って行った。私が最後に甘川の姿を見たのもそのときだ。さあ、話

はこのくらいでいいだろう。そろそろ阿倍野も意識を取り戻す頃合いだろう。そうしたら、寄り道せずに家に帰れ。詳しい話は明日、聞かせてもらう」

そう言い残して竹刀を拾うと、鬼島は校舎の方へと歩いて行く。校舎の中に姿を消そうとするそのとき、鬼島は思い出したかのよう一言言い残す。

「ああ、そうだった。言い忘れていたが、校内で意識を失っていた者は全て、他の先生方が運び出してどこかの教室に退避させたそうだ。それと、大分汚れてしまっただろう、代わりの制服が被服室にあるはずだ。サイズが合うものに着替えてから帰るといい。そんな格好で、外を出歩くのは君だって嫌だろう？」

晴也が意識を取り戻したのは、それから体感時間で5分ほど経ったあとだった。

「ん……」

小さな唸り声とともに、晴也は徐々に意識を取り戻してゆく。それに伴って、感覚や視界も回復していく。

すると、目の前には端正な顔立ちをした少女の顔があるではないか。頭の下には柔らかな感触がある。

これはいったいどういうことなのだろうか……

晴也が意識を取り戻したことに気づいたのか、少女は晴也に言葉をかけた。

「やっと起きた。長い間気を失ってるなんて、男の子なのに情けないぞ！」

その言葉に驚いて、晴也は慌てて飛び起きた。そのまま、梓と顔を合わせることなく、晴也は恐る恐る後ろにいる梓に問いかけた。

「神村……さん？　もしかして僕、気を失ってたの？」

「そうだよ。気を失ってたの」

にこやかな声で、そう返された。

だが、晴也が気になっていたのはそんなことより――

「で、ずっと……その……膝枕、的、な？」

それからゆっくり後ろを振り返ると、そこには顔を真っ赤に火照らせた梓がいた。晴也の顔を見るなり、梓は更に顔を紅潮させる。

しまった……余計なこと言っちゃった……。

そう思って後悔しても、時すでに遅し。

「バ……バカアツ！！　いきなり、なな、なんてこと言うのよっ！
！」

赤面した梓は座り込んだままその場でじたばたする。改めて指摘されたことで、恥ずかしさのあまりに思わずそのような行動をとってしまった。

「……………」

どうしたらいいものか、それがわからず沈黙。だが、梓はそれが気に入らなかったようで、

「何よ？　黙ってないで何とか言ったら良いじゃない！」

ムスツとした顔で怒って見せた。しかし、これは心から怒っているのではなく恥ずかしさをなんとか誤魔化そうとしてのことである。

「えっと……ごめん。いや、ありがとうのほうが良いのかな？」

呟くような形で自問自答。そして、続ける。

「ありがとう、神村さん。気を失った僕のこと、看病してくれて」

「ふふ……どういたしまして。といっても、見守ってただけなんだからね……」

頬を桜色に染めながら、梓は晴也の言葉を受け入れる。それから、少し戸惑ったような感じで梓が口を開いた。

「えっと……その、なんだけどね。わたしのことは、梓でいいよ。その代わり、わたしもあなたのことは晴也って呼ばせてもらうからね？」

唐突な申し出だった。いきなり女子から名前で呼び捨てにしてくれと頼まれるなどとは思ってもいなかった。

しかし、晴也自身、そういう経験が全くないというわけではない。中学時代まで——つまりこの雷同高校に進学する前まで——晴也は幼馴染の神崎愛かんざきまなのことをマナと呼び、愛は晴也のことをハル君とお互い呼んでいたのだ。その経験から、呼び捨てにすることに対しての抵抗はさほどない。

だが、ここで問題なのは、晴也と梓は今日出会ったばかりだということだ。愛の場合は、幼馴染という関係上、かなりの時間を共に過ごしてきた。だから、愛のことをマナと呼ぶことにもハル君と呼ばれることも大して気になることはなかった。しかし、今の場合

はそうではない。

出会ったばかりの女子を――相手からそう頼まれたとはいえ、呼び捨てにしても良いのだろうか？

ほのかのことですら委員長もしくは、中野さんと呼んでいて、ほのかの方も阿倍野君と呼んでいるほどのだから。

もし、この場に風間がいたなら二つ返事でOKしていただろうな、と晴也は思った。だが、自分はそのまで軽薄にはなれない、いやなっ
てはいけないと心のブレーキが作用してしまう。

晴也が思索を巡らせていると、梓が僅かに目を潤ませて聞いてきた。

「やっぱり……ダメ、かな？」

「いや、そういうわけじゃないん……だけど、さ」

結論を出すまでの時間稼ぎとして、曖昧な返答をする。

しかし、梓はそれを時間稼ぎには利用させてくれないようだ。晴也の言葉から間髪入れずに梓の言葉が続けられる。

「ダメじゃないんでしょ？　だったら……いいじゃない……」

今すぐにでも泣き出しそうな、そんな声で頼まれては断るに断れないじゃないか。

そう思って、晴也は不本意ながらも梓の申し出を受け入れることにするのだった。

「わかった……それでいいよ。あ……梓……」

ぎこちなく、そう言う。

そして、明るい声で、こう言われる。

「ありがとう、晴也！」

そこには泣きそうな梓の姿はなく、微笑みを浮かべている梓の姿しかなかった。

もしかして……騙された？

今更そう思っても、手遅れなのだった。

それから2人は鬼島に言われたように、被服室へと向かった。隣を歩いている梓は機嫌が良さそうだ。

まあ、機嫌を損なわなかっただけましか、そう思うことで無理やり納得することにした。

思わず、愛とも似たようなことがあったな、などと思い出す。

目的の被服室はこれまでいた屋上と同じ棟にあるのでそう遠くはない。なので、屋上を後にしてから僅かな時間で辿り着いた。

そこには鬼島の言っていたように、確かにサイズの異なる何着かの男女の制服が教室備え付けのクローゼットの中にあつた。恐らくは予備として用意されていたものだろう。

その中から、合いそうなサイズのものを選び出して、手に取る。今まで着ていた制服を脱ごうとして、梓が上ずった声で晴也に言う。

「ちょっと外に出てて。その、の……覗かないでよ……？」

「え……って覗くだなんてそんな……！」

それを聞いて、晴也は慌てて被服室を飛び出した。もちろん、ドアもちゃんと閉めて、被服室の窓から離れた所に退避する。

それから少しして、梓が姿を現した。

「もういいよ。次は晴也が着替える番」

晴也の目に入った梓の姿に、少し違和感を覚える。

なんとなく……小さいんじゃないのか？

晴也にそう思わせたのは、シャツの裾から白いお腹が覗いていたからである。スカートも、僅かながら短いような気がする。

そんな晴也の視線が気になったのか、梓が非難の声をあげた。

「な……なに？ そんなに、ジロジロ見ないでよ……」

「そんな、ジロジロなんて見てないよ！！ ただ、なんとなくサイズが小さいんじゃないのかなって思っただけだから」

「やっぱり見てたんじゃない。サイズをちよっと間違えただけよ」

これ以上、梓から非難の声を浴びるのも嫌だと考え、早急にその場を後にして晴也は被服室の中へと姿を消した。

ものの数分で綺麗な制服へと着替えると、晴也は被服室から出る。

「お待たせ」

「うん。じゃ、そろそろ帰ろっか」

「そうだね、大分暗くなってきたみたいだし」

2人はお互いに頷くと、足早にその場を後にして、正門に向けて歩き出した。

正門へと向かう間、2人の間に言葉はなかった。そのかわり、2人は今日の出来事に思いを馳せていた。

妖魔と戦ったこと、魔能の力に覚醒したこと、般若面の者と戦ったこと、甘川と戦ったこと――たった一日でいろいろなことがあり

すぎた。

そして、その一つ一つが衝撃的であり、また晴也には新鮮なものであった。それは刺激といってもいいだろう。

良くも悪くも、今日の出来事は晴也にとって良い経験となった。今まで生活していた世界の裏で起こっていたこと、それを直に見せつけられた。

今までの日常が上辺だけの平穏だったことを直視させられた。その裏で、どのようなことが行われているのかも。

これからも、この魔能の力で戦っていくのだろうか……

気がつくと、既に警備員詰所の前にいた。中で倒れていた警備員も姿がなくなっており、鬼島の言ったとおりどこかに運び出されたようだ。

校外へ出るために、一度警備員詰所の中に入る。そこを介して校外に繋がる扉から外に出る。

「ふう……やっと帰れる」

伸びをしながら、梓が穏やかな声でそう漏らした。

「そうだね」

晴也も安堵感の感じられる声で返事する。

と、そんなときだった。

遠くから、下駄の足音が聞こえてくる。それはドンドン大きくなり、2人から少し離れた所で止まった。

そして、声が聞こえてくる。若そうではあるが、少し渋めの声。

その声は、こう言った。

「よっ、大丈夫だったか、梓？ 迎えにきてやったぞ」

突然聞こえてきた声に、晴也は咄嗟に身構えてしまう。しかし、梓の方はそんな素振りを見せない。

「誰だ!!」

その声に対して晴也が声を上げる。

「ああ、ごめんごめん。まずは自己紹介からか。僕は清川豪徳きよかわごうとく。ここにいる神村梓の保護者さ」

そう言って姿を現したのは、法衣を纏った、20代後半と思われる男だった。

そして、男は続ける。

「君は……もしかして、梓の彼氏かい？　そうか、梓ももうそんな年頃になったのか！」

それを聞いてウンザリした様子の梓のその表情が、妙に印象的だと晴也は感じていたのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4606v/>

セプティモゲート―聖者の黙示録―

2011年12月19日22時03分発行